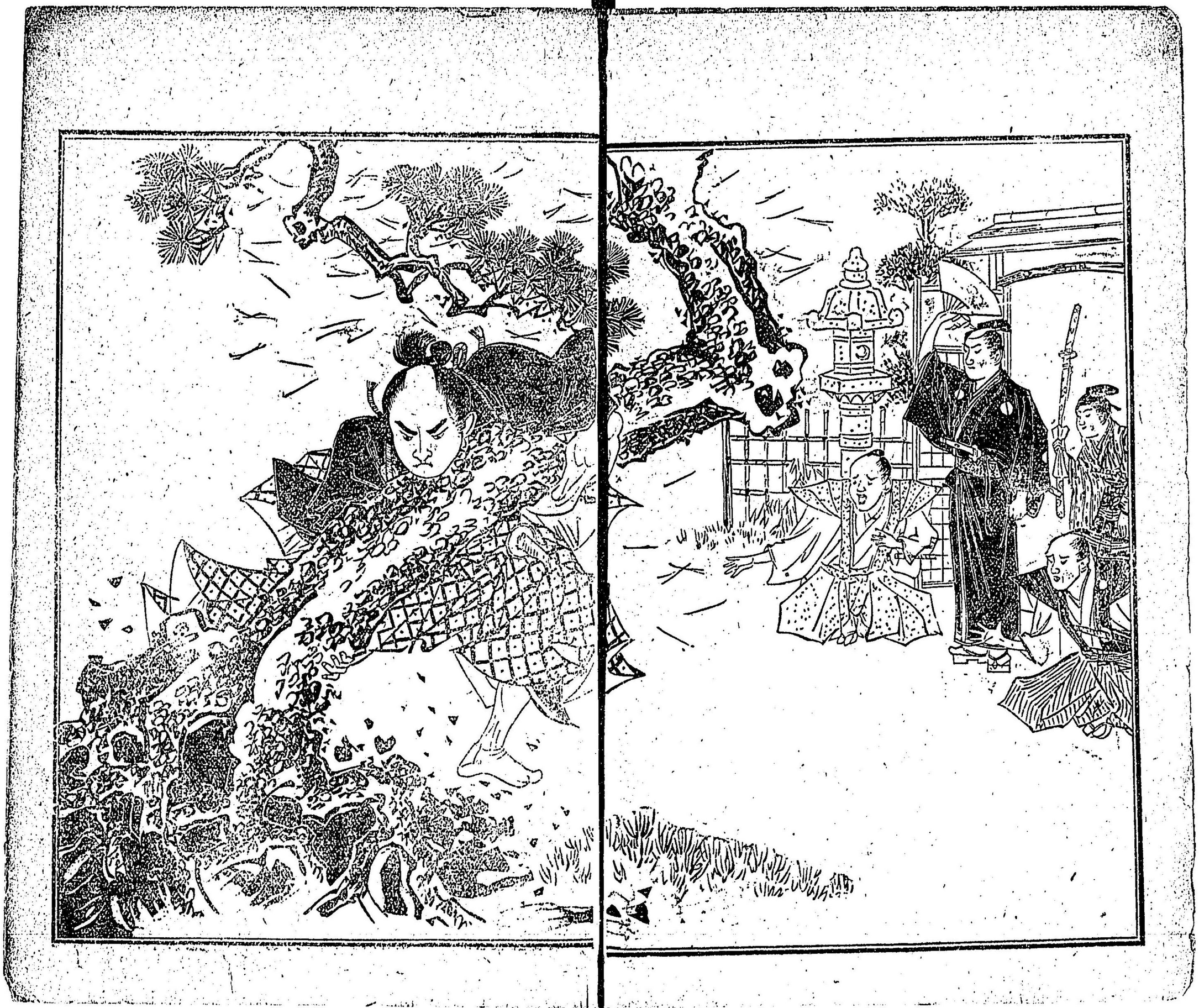
寛政
復讐
山崎勇婦傳

寛政復讐　山崎勇婦傳はしがき

速記小説としいへば侠客、武藝物、敵討、人情談と相場は極つて居るやうだが何うしてア、も販賣るものだらうと或ひは人も疑せんかなれど敢て疑うにも當らぬテ。夫よはそれだけの又妙がある。講釋師とて若年に爲て空板叩きから十數年の勉強を積んで切磋琢磨の功を積み來りしもの。速記とても一つの妙だたかから其一册の本に就てそれ〳〵必ず特得の妙があるから面白い。小説則ち文學家とか何んとかいふ人が書たものは直さに廢れる、明治二十年の頃から小説の浩革は何の位いであらう。其所以は何んたといふと何々學校とかいふ然るべき學校を卒業して學力は少しはあるが放蕩の爲に學資の欠乏を來たし幸ひ少し



小説志想がある所から一つの小説を書て見る、夫が偶然よも書肆で賣れて歡迎され开で始めて小説家になるのである夫だから志想が豊富でない、爲に似たやうな小説ばかり出來るから賣れなくなるといつたやうな譯で……ヤイ是は山崎實記の巻頭を寝言で埋てしまつた。

無名氏記

特9
149

寛政復讐 山崎勇婦傳

田邊南鱗講演
加藤由太郎速記

第一席

えー茲に寛政の頃はひ江戸深川新大橋において貞婦孝子が父良人の敵を打つて永く世上に芳名を殘したと云ふお話しがございます之は或節より確かなる事實を探り得ましたに由つて此度口演いたす事と成りましたが相違らず御愛讀の程を願ひます。

爰に三州西尾の城主松平和泉守殿の家中に山崎達左衛門と云ふ侍があります先祖は近江源氏にして佐々木氏を名乘りましたが

此彦左衛門の代と成つて地名を形取り山崎氏と名乗りましたので和泉守様江戸定府にて用人格彦左衛門奥家老を相勤めて一子彦作と云ふ者があります此彦作今年十七歳でありますが力量人並に勝ぐれ取り分け武藝はろの道に達し其外手跡算術と云ひ士道に一として欠けたる所なく一家中の者に稱美いたされて當時御近習小性役を勤めております

しますが此彦作一度廓の色香に染みたのが病付とありまして何時しか若いものだから身を忘るゝ樣に相成り廓通ひをさし〳〵やつて居ります内に今では忠勤どころか大事の御門限時にさへつて來ないと云ふ有樣ゆへ初めの内ころ誰れも取り上げて云ふ者も無かつたが人の口に戸が立てられないと世間の譬へ何時しか父彦左衛門の耳に入りましたから彦左衛門においては大ひに立腹して

彦如何なる天魔の身入りしものか悴彦作が此頃の

廓通ひ御用の暇を盗み法外の遊びをなすさへあるに御門限にも歸り來ぬとは不届至極他人の耳にさへ通入りしを父の身として知らざりしは吾が眼まり迂も性根の腐りしものなれば此上云ひ聞かすとも詮方あるまじと流石は武士氣質でありますから人にも聞かせず彦左衛門自分の胸一とつで彦作を勘當いたして仕舞ひましたから彦作も今は後悔いたしましたが跡の祭り急に浪々の身と成つて彼所に半年此所に一年ぶら〳〵して居ります内に恰度本芝一丁目に然るべき明家がございましたから彦作此家を借り受けまして劍術指南と云ふ看板を上け山崎左内と改名して劍道の指南をいたして居るすると全じく此本芝二丁目に松下才助綱治と云ふ浪人がありまして先祖は赤松家にて今川義元の旗下松下嘉平治の末葉でありますが此才助綱治の父は相州小田原の城主大久保加賀守殿家中において供頭を相勤めて居

つだが仔細あつて安永三年大久保家を浪人いたして程なく沒しましたから才助も其後浪々のまゝで當時は手跡指南を家職としてゐる月日を送つて居る此五六日以前から才助不圖病ひが起りましてどつと床に就きましたから妹のみきと申するもの當年十六歳の娘盛りであるが兄の看病に身も世も忘れて醫師よ祈禱よと樣々に心を碎いて居るけれども一向にその利目が無いはおみきこりやあ迚も斯うして居たのしやあ兄さんの病氣は癒らないこの上は例の令力に及ばずとも一心凝めて神信心をいたして見やうとそれから目黑不動尊へ日參をして兄才助の病氣平癒を祈つて居る恰度今日は父の命日に當りますからおみきは不圖心注いで與澤九品佛へ參詣をいたして歸ります途中秋の短かき日は早くも暮れて入相の鐘の聲がでーんと聞えるおみきは一人物淋しく田甫道を立ち歸つて來ると此方は山崎左内新田池上へ參詣して

其序に仝じく之も九品佛へ參詣致しての歸り路でありますから恰度田甫まで來るとおみきの跡にあつてとぼ〳〵とやつて來る日は暮れて仕舞つて四方に人家さへなき田甫道物淋しく思ひながら來たところのおみきが跡の方で足音がするから何者だらうと振り返へつて透して見ると山崎左内とは知らないが大きな男の黑い影が段々あとを尾けて來る氣丈ものではあるが女だけに又薄氣味惡るく思ひまして今度はおみき少し早足に成つて歩き出す左内は然んなことは知らないから何心なく歩るいて居て不圖前を見ると其所へ急いで往く人の姿慥かに女の樣だが時々此方を振り返つて見ては足早に歩るいて行く樣子だから左内は考へた　左はゝあこりやや女一人で矢つ張り九品佛樣か何かへ參詣をした歸り路此んな田甫で日が暮れて淋しい所へ乃公を見た樣な大男が跡からのろり〳〵と往くものだから薄氣味惡るく思

つて時々跡を振り返つて足速に那んな歩行き方をして往くのだらう者かす氣じやあ無かつたが知らなんだから仕方がない可愛想にまだ心配しながら往く樣子だ濟まなかつた〳〵こりやあ、乃公は休すんで居てずーつと跡から往くと仕やうと左内は傍にあつた石へ腰をかけて煙草を取り出し其所で一吹やつて居るおみきは道を急きましたからもー九品佛から一里餘りも田市道を此方へ來た恰度其夜も五つ頃野末の彼方から月が、昇つて芒尾花の間を照らして居ります折柄向ふから來りまするは五六人の若侍

侍「えーい……何うでござる山中氏圖々しくとして月は上る風は酔顏を撫ぜて吳れる無情のものでも男が宜いと斯う待過して吳れるから有難いげーつふ……

山「如何樣伏屋氏のみならず好男子揃ひの今宵の一行芒尾花が招くは〳〵

丙「こりやあ面白い御兩所のお見立……えーい……年毎に思ひ增す穗の糸すゝき……吹く

や……風を心にもせでかなあれ那の姿を御覽せよ三日逢はなきや腕が細るまるでお化の手の樣だ

丁「お化けの手の樣でも感心にあーして呼んで來れるから難有いさあ〳〵各自素通しも罪と存ずるから何は兎もあれ立寄つて遣はさう

戊「これはしたり各自方は大分酩酊いたしてござらるな

丁「然う云ふ貴殿は如何でござるな

戊「同じく酩酊はいたして居るが芒を女郎と見るまでには未だ〳〵酔はんて……えーい

伏「や後りの齋藤氏貴公は全体何を云ふのだ芒を女郎に見立てたのが酒に酔つたと思召すか

齋「如何にも酔つてござらつしやる

伏「ふらつしやいそれだから貴公は話せない武士の氣質で頑固は賞美いたすがうれしやあ餘り雅が無さすぎる風流がない野暮だ遊女に振られる持てない

齋「それ〳〵

伏「屋氏左樣お棚下ろしをしたところで買人はない幾ら風流があると云つて正逆に芒の襟つ首へかぢりつ付け

もされまいあは……負けず劣らず酔つて居る五人の侍冗戯か吸酒落か知らないが高々と笑ひながら千鳥足おみきはばつたり之に出逢つたから足を止めて迂路々々して居る　伏「やゝ……こりやあ本物だ正物だ……　山「成程之は婦人の正物……はてな……婦人が芒に化けて居たのか　齋藤氏襟つ首の先登は如何でござる　齋「うーむなゝ成程これは正しく美人いでや拙者が引つ組んで功名手柄はしひまゝと生酔の齋藤がつかゝと歩るいて近く次いで一人又二人亂暴な奴があつたものでイんで居る所のおみきを前後から取り巻いたおみきは流石に怯ろいて　みき「何れのお方様達かは存じませぬが繊弱い妾を取り囲んで何う遊ばさるのでございます　伏「何うなさるとは野暮すぎる今宵の月を幸はいに此草原が祝儀の座敷さあ樂しむから一緒に來なさい　みき「これはしたり御冗戯をなすつちや不可

ません見れば立派のお侍様姿の様な端なきものをおからかいなすつて武家の恥ではございませぬか左様なことを仰しやらずに切望此所をお通し下さい　伏「いーやうりやあ相成らん恥でも恥でなくつても男一貫云ひだすからには吃度通すさ彼之云はずと此方へと袖を取つたからおみきにおきまして もー此れまでと取られました袖を振り拂らひ逃げ出さんと忙つたが男が五人に女が一人無二無三に引つ捕らへて怪しき振舞に及ばんとするおみきは一生懸命に聲を上げて　みき「あれ……助けて……と呼べど叫べど人なき野原。

此方は山崎左内もー歩行き出しても大事ない頃と田甫道を相變らずのろ〳〵とやつて來ると何方ともなく逃げき方から女の泣き聲叫び聲が聞ゆる樣子　左「はて何だらう女の聲の樣に聞えるがひよつとして今の女に間違でも出來たんじやあないか知ら

あー大分騒を立てゝる様子だ何は兎もあれ往つて見やうと左内は心注きましたから田甫路を一散に駈け出して聲を便りに來て見ると四五人の侍共が一人の婦人を手込めにして今狼籍にも及ばんとする有様ゆへ物を云はず駈け寄つて突然なり鐵拳を振り上げて二人の横つ面をえーいと投ぐつたから一同驚ろいた一同狼籍者つ　左「拙へろ何か拙者が狼籍をいたした人もあらうに武士の身として刀の手前に恥もせず斯様に婦人を脅ませたる其方達ころ狼籍であろうあべこに云ひ込められて一同がそれと眼配せをいたしながら一時に左内に打つて掛る元より覺悟の山崎左内前面から來つたる一人を蹴倒し透かさず左右より飛ひ掛る奴を片膝突いて身を沈め両人の脛を拂らつたからあつと云つてろれへ倒れる殘る二人の襟髪取つてえいと一撃二三間彼方の田甫へ頭轉倒起き直つて來るかと思ふと五人の侍濡れ鼠が逃げ出す

様に一生懸命で逃げ出して仕舞ひましたおみさは夢に夢見る心地いたして痛めし手足を撫せて居る左内が月明りに透して見ると色は雪なす二八の美人　左「如何でござるお怪我でもいたしましたか問はれておみさは初めて心注き風姿を改めて夫へ兩手をつき　みさ「はい難有う存じます誰方様かは存じませぬが斯様な所をお助け下さいましてお禮の申し上げやうもございませんお蔭を持ちまして別段怪我と云ふ程のこともございません　左「いや怪我がなければ何より結構まだお年若い女の身で斯様に遅く斯るところを何所へお出でなさるゝのか　みさ「いえ參るものではございません私しは本芝二町目に住居をいたす松下才助と云ふものゝ妹みさと申します此度兄の才助病氣のため一日も早く平癒を祈らんと目黒の不動様へ日參をいたし今日も今日とて參詣の途すがら不圖心注きまして九品佛へ廻り參詣をして此所ま

でまいりますると今の侍方が私を捕らへて無二無三に猿縛いたし危うき所を仕合せよく貴方様がお助け下さいまして此上の喜ひはございません　左「御挨拶で痛み入る時におみきさんとやら只今のおはなしに由るとこれではこれから本芝へお立ち歸りなさるゝのか　みき「左様でございます　左「拙者も本芝一丁目に住居いたすが御迷惑でなければ御同道いたさう　みき「何ういたしまして迷惑どころではございませんよき折柄でございます左様なれば切望御一緒にお連れ下さいまし　左「宜しうでざると山崎左内計らぬところでおみきの災難の場所を救ひ其夜も遅く本芝二町目なる松下才助の宅までおみきを屆けまするとそこでは才助か待ち兼ておりましたから　兄「やーおみき歸つてまいつたか斯様に遅くまで何所に居つた　みき「飛んだ御心配をかけまして何共申し理由もございません實は今日日參の歸りかけに阿父さん

の命日でございますから九品佛様へ廻りましたところ其歸り路の田市におきまして斯々云々と委細を語りましたから病中なから松下才助床の上に起き直つて山崎左内に逢ひ厚く此日の禮を述べ、左内は深更なから吾家へ立ち歸りました。

松下才助におきましては妹みきか心盡しの介抱に由つて日に增し快よく相成り頓て全快にも及ひましたから最て病中みきか助けられましたる本芝一町目山崎左内方へまいりまして懇々と其折の禮を述べましたところ左内も才助か病氣全快を喜ひまして其後は相互ひに浪人のことでありますから何時とはなく往來の交はりも繁くなつて兩人は兄弟全様の仲と相成りましたるとも才助は考へた　才「何うも左内は今浪人の身と成つて尾羽打枯らして居るけれども武術と云ひ器量と云ひ末樂母しい男である今那あして獨身で居るのは何より幸はひ切望妹みきを娶はして末

始終互ひに力となりたいものだと才助も見る眼がありますから悉く左内の身体を望んでそれからうれと手を廻し漸う河内屋長兵衛と云ふものが左内と心安達の仲であると云ふことを聞きましたから早速此長兵衛に巨細のことを話して縁談のことを相談して見ると　長「宜しうございやす貴方のお妹御ならば決して恥かしかあありませんぢ度左内様も承知しませうから御安心なすつて入らつしやいましと云ふので河内屋長兵衛直ぐに左内の宅へ來て此話しをすると左内も年頃別けておみきの様子は知つて居るから早速に承知をいたして此所に縁談がまとまり立派に婚姻の式を挙げて左内とおみきが偕老同穴の契りを結びましたは安永七年九月廿七日のことであります。

山崎左内におきましては才助の妹みきを引き取り夫婦仲も睦まじく相變らず剣道指南をいたしながら早や三年と相成つたがま

だ兩人の仲に子供と云ふものが無いおみきは痛く之を苦にいたしまして良人左内に隠れて内々金杉の毘沙門へ祈願をいたしましたところからの信心の利益にやろの月より懐姙に及び月重つて天明二年寅の二月朔日に一人の女子を上げました夫婦の喜びは云ふも更なり才助も大ひに喜びまして時節柄名前を春と名付け夫婦は只掌中の玉として養育して居る内に早や一箇年も過ぎましてお春は二歳と相成りました其頃禪家黄蘗派の智識蓮法師と云ふ方此左内の家の隣りへ來りまして佛門の説教がありましたおみきは神信心をいたす位いの婦人でありますからお春を懐中に抱いて説教を聞き頓てそれも終りましたが近所のことであるから跡へ殘つて居りますと彼蓮法師おみきの傍にあつて頻りにお春の顔を眺めておりましたが　蓮「何れの御婦人か知りませぬが貴方は結構な子供衆をお持ちなさいましたうーむ中々宜

い子だお仕合せが宜いと獨りで感服して目も放さずお春の顔を見凝めながら　蓮「此子が御成長なさると隨分孝行をいたします　られのみならず中々才發の性れで物覺へは宜い質だ愚僧も之まで六十餘州を遍歴して數知れぬ子供の相格を見たが中々斯の子の樣なのは少ない隨分大切に育て上げて御成長をお待ちなさいと云はれましたからおみきも子を思ふ親心世の中に不具の子を持つてさへ親の心では一倍不憫で堪らないと云ふ況して智識の蓮法師から斯う譽められましたのだから嬉しきことに思ひまして我が家へ歸り良人左内に此ことを話しなすると左内は男だけに敢て然んなことは何共思つては居りませんが果して後に思ひ當る話しとなります。

月日の立つのは早いもので山崎左内は本芝にあつて武術指南を初めましてから早くも七年餘りと相成りました今では門人も數

多殖へまして中々盛んに劍道を砕いて居るが左内は至つて謙遜の性質でありますから誰あつて此人を憎むと思ふ人はありません或時高弟の佐々木と云ふ者が　佐「えー先生へ申し上ます　左「何じや　佐「此度私共一同が新田大明神へ奉額いたしませうと思ひますが切望お聞届けを願ひたう存じます　左「うむ新田大明神へ奉額をしたいと云ふのか　佐「へえー左樣で　左「何うもどりやあ不可んな　佐「えつ不可ないと仰しやいますかそりやあ又何う云ふ思召で　左「さあ別に何うと云ふ考へは無いが神社なぞへ額を上げやうとすると世間へ名が廣まつて宜くあい。佐「へえー左「斯う云ふ所で劍道を研こうと云ふ者が無暗に能くつても惡くつても名前あとを世間へ出すと云ふのは宜くないこと神社へ額を上げるよりか自分達の腕を上げるが宜い　佐「成程それはうでもございませうが自分達は兎も角先生の名前を出す分には

天下晴れて　左「これ〳〵　うれが不可ない拙者と雖ども　〳〵武術は不鍛練兎に角左様なことは止めたが宜からう　左「何うも困りましたなあ　佐「何が困る　佐「實はその何うも早や……聊か左「何を云ふのだ　佐「へい實は先生が左様お思召で入らつしやるとは存じませんから私初め門弟一同にて頼を仕立て上げました左「何も一頼が先へ出來上つて居るのか　佐「へゑ一〳〵　立派に出來ましておざいます　左「困つたことをする奴等だ然らば是非に及ばん奉願いたすが宜い　佐「うれじやあ宜しうございますか難有う存じます仕方がないから左内も名前を書き記し安永八年亥八月新田大明神へ願を納めまして一同は晝夜怠らず武術稽古をいたして居る今日は休日であるから朝から道場を清めておいて内弟子のものも皆んな遊びに出て仕舞ひ家には左内夫婦ばかりでありますすると表から年の頃廿三四歳ばかりなる若侍が三人

三人「頼もう……頼もう……頼もう……　内弟子も何にも居ない　から左内が其所へ出でますると　甲「拙者達は信州諏訪のものであるが劍術修行のため當地へ罷り越した失禮ながらお立ち合ひ下さい左内は三人の顔を覗いて居ましたが　左「之はよくてろお越下されて辱しけない併し拙者は之まで當流の外試合と申すことはいたさぬに由つて太刀合の儀は平に御免を蒙むる呆氣に取られて三人顔を見合しましたが　甲「先生御冗戯を仰しやつては困ります　左「いや決して冗戯ではござらぬ拙者は拙者の流義と云ふ者があつてられと太刀合をいたす計り他流は餘り好まんに依つてお斷はり申上る次第　乙「これは又先生の御挨拶とも存せず吾々とても素より未熟の者に候ため斯くは武術修行にまかり出でし次第自分々々の流義ばかりでは餘り世間を知らぬ儀かと存する何卒左様なことと云つて吾や共におからかひなく是非共試合

の程願ひたう云つてる内に跡の二人は餘程氣早の者と見へまし
て早くも草鞋をそれへ脱ぎ道場の中へ這入つて仕舞つた左内は
之じゃあ仕方かないと思ひましたから殘る一人を道場へ案内し
て左「さて各自只今も申す通り拙者從來他流と試合をいたせし
ことなけれど折角貴殿方のお望みゆへ未熟なからお相手いたす
と早速身支度に及んでろれへ出る頃て三人の内から一人立ち出
でゝ双方身搆へに及ぶ互ひに氣合を見て居たが今左内の胴の邊
りに充分透が見へたから　侍「やつ……と云つて切り込んで來る
がつちり止めて先きの面をばん〳〵と二つ重ね打ち　侍「參つた
左「失禮……貴殿は何流でござる　侍「恐れ入ります次いて出て來
た一人は少しく自烈込んで來たものか意氣込も忙しく身搆へに
一進一退之も左内の身体に充分の隙を認めましたから　侍「えい
と一聲木刀を下ろして來るひらりつと体を變して後ろに立ち

左「此方でござるぞひよいと振り返つて見やうとすると面をばか
り〳〵　侍「參つた　左「失禮……貴殿は何流て　侍「恐入りました悄
々として跡へ下つて仕度を取る次に出て來たのは身の丈六尺も
ある大男仲間が二人やられたから滿面に血を賤いで意氣込み荒
く　侍「さあ大先生拙者が此度は相手をする兩人の者と仝樣に思
召すと誤ちがあるから覺悟をさつしやい　左「宜しうござる左内
は腹で可笑つて堪らない形の如く木刀を取つて身搆をいたしえ
いやつと云て双方共に氣合ひを呑み半時ばかりせり合ふ内左内
が踏み込で袴がらみにすり落すと件の大男手込にせんと木刀を
投げ捨て飛び掛つて來る奴を左内隙さず飛び違ひ踏ん込んで大
男の身体へ接したかと思ふと　左「やーつと一聲山雀落しにもん
どりを打たせて大男を投げた所が障子を突き抜けて塀の外まで
飛び出た此時先きの兩人は何所へ往つて仕舞つたか影も形ちも

なく投げられた大男も漸く起き上つて何所を當てともなく出掛けて往つたが其姿の醜しいことゝ夥たゝしい此物音を聞きました所の隣りの主人　主「先生何うなすつたんです　左「や之は久兵衛殿何に今日は休日のことゆへ稽古休みの慰みに角力を取りました所が相手が係り身が輕かつたと見へて拙者が投ると障子を突き抜けて何所へか姿を隠くして仕舞つた　久「へゑ｜夫じや行方知れずでございますか　左「今頃は雲の上あたりを舞つて居りませう冗戯を云つて居る所へ内弟子の者が歸つて來て見ると先生の左内は支度のまゝで居るし道場の障子が破れて骨なぞが滅茶々々になつて居るから驚ろいた　甲「先生こりやあ何うしたのです　左「おゝ小林中村市橋今話しをするから此方へ來るか宜い内弟子を呼び寄せて山崎左内が　左「實は今日斯々云々で拙者が太刀合を致した兎角劍術でも柔術でも双方牛角の場合においては必ら

ず勇氣滿ちたる所の一方が勝を占むるものである今日まいつた大男といへどもろのとはり彼は腕前において拙者と牛角の者なれども倍まり彼の心慢さに切望彼を見事に投げ出さんとした時拙者の身体に勇氣は滿ち牛角の腕前でも此時拙者は勝つたも全しこと木刀を持つても眞劍の心て向ひし故なり況して不慮の場合において眞劍の戰と相成る時は一つは運もあるあれど勇氣か肝腎能く心しておくか宜いと内弟子に論しましたか左内におきましては心掛けと云ひ腕前と云ひまことに言行一致の武士であります

第二席

さて山崎左内は本芝一丁目にあつて相も變らず劍道の指南をいたしておりましたか人間生身を持つて居りまするとは何時何う云

ふことが起るか知れません左内不圖煩ひ就きましたのか基で醫
薬は云ふに及ばず女房みきか心盡しの介抱も更らに利目はあり
ません恰度一年半ばかりと云ふ者を病床にあつて送りましたか
ら今は弟子もず一つと減つて壮年ひまして此頃先生の見舞にで
も來ると云ふものは至極稀れでございます殘念だが稽古をして
遣ることは出來ず身体は益々頽つて來るばかりでありますから
左内もこれしやあならないと頭りに氣を揉んで居りましたが或
時考へて　左「みきや　みき「はい何か御用でございますか　左「い
や別段用と云ふのでもないが私もこの長い煩らひでお前にも一
方ならぬ心配をかけ切望まあ一日も早く宜くなりたいと思つて
居るが自分の身体で自分の自由にならないものは此の病氣だ就ち
やあ箱根の温泉へでも往つて入湯したら少しは宜くなるだらう
と思ふがおみきや何んあものだらう　みき「此までに何から何ま

で手を盡しましたが何の利目もない貴方の御病氣成程箱根へせ
もまいりまして緩くり御養生を遊ばしたら吃度お宜しいかも知
れません　左「お前も然う思ふか何だか斯う思ひ付いて見たら急
に今日でも宜いから往きたくなつた　みき「左樣でございますか
それは今日でも宜しうございますが御大病の身体で貴方ばかり
お出でになる理由にはまいりませんし私しも兄樣と相談いたし
たうございますが何を云ふにも兄さんも此頃では病氣再發いた
しまして誰とてしんみに看病するものはありませんお心急くの
は御道理でございますが切望もし一少しの間御辛棒をなすつて下
さいと云ふのは良人左内が長の煩ひで弟子は來なくなるし物入
りは嵩むばかり固より良婦でありますからおみきは病人になれ
とは聞かせませんが今しやあもし一腹の中は火の車兄の才助の所
へ往つては少し計りの無心をして其日を送つて居りましたが今

度は才助の病氣が再發した身体は一とつで大事の二人に煩はれて居るのだから之程辛いことは無い四苦八苦の思ひで彼方を看病し此方を看病して居ります内に松下才助は之までの報命が到當果なくなつて仕舞ひましたおきみは涙の内に之が葬式やら雜片附やらを行ひましたが何しても兄の才助とて有り餘る身上て居たのではありませんから何と費ひ果して仕舞つた今ヒやあおみきの身体に一文の才覺もつかぬ樣に相成りました仕方がありませんから家財道具の樣な物を段々と賣り代なして良人左内の病氣を一心に介抱いたしておりますると此頃では左内餘程宜く成つたものか少し位いの立歩行をも出來るやうに相成り日を重ぬるに從つて次第に元氣もついて參ります　左おみきやお前のお陰で乃公も漸う此程に成つだが困ると云ふなあ今日からの生活方だ弟子は皆ばら〳〵に成つて仕舞ふしまだ〳〵乃公

の身体も然んな所へは中々利きさうもない就ちやあ一日も早く元の身体に返る道を考へて出來るだけの稼ぎをしたいが後ておき前にも話したとほり乃公は何うしても那の箱根の温泉が宜いやうに思ふが何うだらう病つて居りまして家の樣子も知らなければおみきの遣繰算段も知りません併しおみきとても今漸く本復し掛つた良人に此んなことを打明けたら此上心配して身体にも障るだらうと思ひますから亭主思ひのおみきみき左樣でございます何時ぞやお話しに成りました時は兄の才助が那の通りの病氣でございましたから到當箱根行のことも立ち消へに成りましたが兄さんは那の通りお果てなさいますしも一心殘りのこともありませんからそれじやあ御望み通り私しも箱根へお伴をいたしますから一日も早く那方へ立ち越へて御養生を遊ばすことにいたしませう　左時にみきや乃公は今まで寐てばかり居つた

身故家事向のことは一向知らないが定めて何かに不自由いたしたらうな　みさ「左様なことを御心配遊ばしますな定めて貴方も不行届でございましたらう　左「いーや乃公は至極満足だお前の心盡しでこれまで介抱してくれたのは並大低では出來ぬ業さて箱根へ往くと云つた所は旅へ出れば何にごとも金子でなければ用が足りん二年以來頻つて乃公も自分の家だから大方何も彼も知つて居るが何うだおみさ早いところが斯うして箱根へ出掛けやう　みさ「何んなお考へかでございますか　左「さあ此江戸に今から此身体でぶら〳〵した所で中々稼ぐ道のあるものでもない一先づ仕方がないから此所を疊んで出來るだけの金子を細め其金子を持つて箱根へ往き塒合に由つたら箱根の土にをる心得で落付いて時を待つとしたら何んなものだらう　みさ「はあ成程夫も宜しうございましまいせうおみさは決して逆らひませんせん良人左内が斯

う思ひ立ちましたことゆへ據ろなくおみさも其了見に成りまして此所で本芝一丁目の自宅を疊み家財道具の樣なものを悉皆賣り代なし少しばかりの金子が纏りましたから夫婦はお暇を運れまして本芝を立ち退き左内も此頃では足も利きますから杖に縋つて東海道を昨日は三里今日は四里と最も氣永に道中をして小田原の宿へ着しましたのが七月二十日夏のことでありますから左「おみきやもー此所まで來れば箱根と云つても知れた道何うも斯う暑くつては道中は迚も出來んから日が遣入るまで此所で休んでろれから悠然り出掛けやう　みさ「私しも然う思つておりましたところ幾ら御本腹遊ばしたと申しましても御大病の後夏の道中と云ふものは却つて夜の方が宜しうございますそれじやあ此所で休みませうと親子三人は宿はづれの掛茶屋へ立寄つて日の沈むのを待つて居る　左「お婆さん乃公は江戸から來たもので

少しも此方の樣子は知らないが那の箱根の湯治場へまあ吾々の樣なものが往つて永く湯治をして居やうと云ふには何と云ふ家が格好かな　婆「へゑー左樣でございます何うも數多くございましてな何れつて別段取り上げやうもございませんが……傍に居りました所の若い男が　男「お侍さん貴方は御湯治に入らつしやるんでございますか　左「お！湯治と云つたところで眞の養生に往くだけでございるが今もお婆さんに聞く通り乃公達は乃公達全樣の所へ厄介にならうと存じてな　男「いゑ御冗談を仰しやいまして旨く云つて入らつしやる……御存知かあ知りませんが那の宮の下と云ふ所に三河や吉藏と云ふのがございますての三河やは家中揃ろつての親切者で中々客をうらしません婆さんも膝を叩いて　婆「然う〳〵ろの三河やの主人吉藏さんと仰しやる方はいやもー中々の親切好で感心のお方でございます　左「左樣でさるか然らば拙者達もろの三河やとやらへ往つて一先づ厄介相成らう　男「然うなさいまし實は私しも今から那の三河やへまいりますもので　左「左樣でございるかられでは貴殿はろの三河やと云ふのを御存知で　男「ゑーもー毎日朝晩と斯う二度那所の家へ顔を出さない日はございません　左「成程之はよい仕合せ然らば御迷惑でも御仝道を願ひたいものだが　男「宜しうございます一人でも往かなければならない道でございますからお伴を願ひますれば私しも仕合せもー直に日も限りませうからそれでは御一緒にまいりませう知らぬ男と懇意になりまして左内は色々話しをしながら日の入るのを待つて居るところの内に日も暮れました男「お侍さん大分涼しくなりましたろれとやあお伴をいたしませう　左「然らば御一緒にまいらうと左内は杖を取つてとぼ〳〵と道を辿りおみきはれ春の手を取つて之も仝じくとぼ〳〵と歩る

いて行く順て坂道に掛りまする日はとつぷりと暮れて仕舞ふ

男「旦那様御新造様誰方もお浮雲でございますさあ嬢様此所は私しが負つて差し上げますから負ぶをなさい　みき「難有うございますが却つてこれでは恐れ入りますなにも一此うして綾くり歩るいて居りまするれば別段浮雲いこともありません　男「いゑ馴れぬ道と云ふものは幾干殺くりお歩行遊ばしても難渋のもの決して御遠慮あさいますなさあ〳〵嬢様負いをなさいまし　みき「お春やお前負ぶをして貰ふかいえ厭だえ……難有う存じますがもー少し歩行くと申しますから　男「然う仰しやらずに負さつて入ちつしやいさあ〳〵と頻りに勧めて呉れますから厭やがるところのお春を件の男の背中へ預けおみきは左内の手を取つて心を配りながら坂道をやつて来る頓て二三丁目も歩行いて居る内に件の男はお春を背負つたまゝ左内夫婦より一丁計り先の方を歩る

いて居る　左「おみきや何う云ふ男だか知らないがお春を背負つてずん〳〵先きへ往くのは多分三河屋へ先に往く心得りだらうが乃公もお前も三河やをてろか全体其宮の下と云ふ所さへ譯らない何うだ一とつ呼び止めて聞いておいたら　みき「左様でございます何しろまあ呼んで聞いて見ませうおもー那んな所まで往いて影も見へない位い　左「乃公はこの通りの身体だから一緒に追つかける理由にもならないがお前切望追ひ駆けて往つて聞いてくれ　みき「畏まりましたと女房おみきが裾を端折つて闇なから往く手の方を透かしながら小走りに駆け出して　みき「もーし……一寸お待ち下さいまし……もーし……呼んだけれども返事が無い聞えないのに相違ないと倘駆け出して　みき「もーし……お待下さい……一向先きへは聞えません様子する内に十町餘りも追つ駆けたが先きの男も急ぐと見へて中々追付けそうにも仕

ない二十日の月が山の端を放れて朗やと照り渡りましたがらお
みきがお春を背負つて往く所の男の姿を見ると二丁計り先の所
へ蹤が屆いたものか休んで居る樣子宜い鹽梅だと其所へ駈け附
けまして　みき「何うも御厄介に成りまして難有う存じますさあ
お春や今度は母樣に負ぶを仕てお出で　男「やあ御新造樣ですか
いさぞお勞れ遊ばしましたらう旦那樣は何うなさいましたみき
はい御承知の通りの病身故只今跡からまいります云ひながら男
の樣子を見ると何となく怪しいと思ふ所があるから　みき「之ま
で背負つて頂けばこれから跡は私しが背負つてまいります貴方
はお急ぎでございませうから三河やと云ふお家は何の邊で御座
いますか私しにお敎へ置きを願ひます何れ跡から伺ひましてお
禮もいたしませうから　男「急ぐか急がないか御新造さん貴女は
能く知つて入らつしやいますなあ男の樣子がころりと變りまし

たからさてはとおみきは初めて氣が注き　みき「之は失禮を申し
上げました、お詫は必らずいたしますから、切望お春を此方へお渡
し下さいまし　男「まあ〳〵然んなに忙くことはありません、全体
お前さんは私を何だ思つてるんだ　みき「これはしたり、御親切な
お方としきやあ思ひません　男「商賣は何だか知つて居るか……
名知らない……知れておたまり小法師があるものかい、乃公達あ
此箱根の山中に住居して旅人を痛める胡麻の蠅　みき「えつ……
男「何も然んなに吃驚りするこたあねあ金子を出せたあ云はねえ
から、お前と此娘と大人しく乃公の云ふ通り來りやあ宜んだ、見た
ところが疲て果てた、今日か明日かと云ふ野郎に操を立てゝ年が
若えにこれから埋木に成つちやあ惜しいものだ、手荒な仕事は仕
て居ても、然う〳〵邪慳にやあ仕ねえから、ああ乃公と一緒に來る
が宜い　みき「さてはお前は然んな惡黨であつのか　男「惡黨たあ

何ぞこれ程親切に云つてやつて惡黨あぞと云はれちやあ間尺に合はねゑ我强情を張つて居て痛い目に合ふよりか早くうんと返事をして此所を立ち退いて仕舞はうじやあねゑか此方は今更驚くおみき良人の左内は如何いたしたか早く此所へ來てせめて身体は利かなくとも剣道指南の腕前で此奴を何とか所置して欲しいと月明りに今來た道を透して見たがろれと見るべき影もない泣くにも泣かれず迂路〳〵いたして居るおみきを見て男「さてはこれ迂路々々した所でお前の亭主は此坂下で疾くにお陀佛した筈だ」

さては惡者共に計られてお春は森はれ其上に妾が此所へ來た跡で良人左内殿は打たれしかそれとは知らず娘のお春を大事と思ひ込んだるゆへおめ〳〵人に非業の死をさせしとは情けない此上は女ながらも左内の妻此奴が望むまゝに見いて往き兒に角實否を糺した上恨みを晴らさでおくべきかと心中深くも思案して尙も來た道を振り返り振り返つて見て居たが更らに良人左内の來る樣子もないさては彌々此奴の云ふ通り惡漢共の手に掛つて御最後遂したか情ない居いて往つて樣子を探り確かに良人左内が非業に例れたとなれば其所で恨みを報ゆるも宜けれども考へて見れば然んな場合でないてりやあ寧そ此ところで此奴を殺し娘を無事に取り返して今來た路へ舞ひ戻り良人の生死を見屆けるより外は無いと覺悟を極めて女房のおみき懷劍ずらりと引き扱いてものをも云はず切つてかゝる兼て手練のあるものか件の男は身を變はし五歳のお春を小脇に抱ひ込み身構へに及んで山刀を扱き之をお春の咽元へ宛てまして　男「小癪な女もあつたものだ娘が可愛いと思つたら懷劍を收めて神妙にしろ何うせ入られゑ命あら兩つ共に貰つてやる可愛の娘大事のお春を人質に取られ今一太刀恨まうとし

た時早くも人質のお春へ刄物を向けられたからおみきは心も消え入るばかり振り上たまゝ懐劍を下ろしもせず考へたおみきこりやあ生中此所で刄向ひをするとお春を殺すのみかでとに由つたら自分の身も浮雲ない生は易く死は難いと云ふから兎に角一旦此所を生き伸びて跡の大事を計らうと思案をしたとき何者か後ろへ立ち現はれた一人が矢庭におみきの懐劍を持つた腕に縋り力に任せて之を捩ひ取つた時　男「鯱松か　鯱「兄貴浮雲なうでぜゑやしたなあ　男「高が女郎の一匹二匹何とも思やあしねゑけれど然うしておいちやあ五月蠅から持つて往くやうに仕度をしろ　鯱「合點だと乱暴な奴もあつたものでおみきをぐる〳〵と縄で縛り上げ猿轡を口へはめて鯱松が之を背負ひ泣き入るお春を今一人の男が小脇に抱ひ込み之も全しく猿轡をいたして何所ともなく立ち去りました

此方は山崎左内お春を負ひましたる所の男がずん〳〵先きへ往く樣子だから不審に思ひ女房おみきに跡を追つかけさせておいて自分は杖に縋りながらとぼ〳〵と坂道をやつて來る月の光りに透して見ると行手の木蔭に三人ばかりの曲者が見へ隱れて今もし自分を待つ樣子さては思ひましたが身体が自由でありませんから矢つ張り杖に縋つて辿つて往く嘶て其所を通り過ぎやうとすると立ち現はれた一人の曲者　曲「お侍待て……　左内はつと思て足を止める　曲「やい三ぴんさあ何にも云はねゑから持つてるだけの金子を出して神妙に命乞をしろ山刀を引き拔いて眼の前へぎらり出したが左内驚ろかない　左「無禮者つ何とするのだ曲者は三人に成つて　甲「やい〳〵大きなことを云つて脅迫かすない何とするとは何が何でい　乙「盜人が出て金子を寄越せと云ふのに何をするつて問く奴も無ねものだ　丙「病み呆けの癡

に噂の尻を追ひかけ廻して之から往かうと云ふのだらうが可愛想に其大事の噂あはな　左「側」と……

丙「聞きてえかそれとやあ云つて聞かせるが乃公達あ此山中に住居をして惡から惡を働くものだ今日小田原の宿はづれから連れになつて此所から娘を脅負つて往つたなあありやあ乃公達の兄分株今頃あ貴様の女房と定めし樂しひ夢魔りさあ斯う云つたら譯るだらう早く有金を出して川へ飛ぶなり木へぶら下るなりして仕舞へ左内は之を聞いてさては山者共に仕て遣られしか殘念である無念である と歯噛をなして吾を忘れ其場へ撞と倒れました

甲「こー〳〵三ぴん腔が拔けたか意句地の無え野郎だなあ神妙にして金子を出したら命ちやあ頂けておかうと思つたが迚も此塩梅じやあ双物の厄介一思ひに往生しろと曲物の一人が太刀を眞向に振り冠つてゐい

たかと思ひきや病み呆けても左内は左内何時立ち退いた曲者の後に立つて腰なる一刀拔く手も見せずばらりずんと切り下げる次いで一人の胴を拂つて一文字逃げ出して往く一人は足が聞きませぬから追ひ駈けもせず見送つて居たが病後の疲れ曲者を追ひ拂つて安神いたしたものかばつたり其所へ倒れました此時右手の岩陰にあつて始終の樣子を見て居た一人が有之ますすてれ何者でございませうか……

第三席

山崎左内は曲者のために計られて大事の妻子を奪はれしのみ其身も危うく曲物の手に掛つて果てんとする所を一生懸命の氣合から病を忘れて立ち働き曲者二名を切り捨て殘る一人を追ひ拂つたからあー安神と思つたものか氣合が拔けばつたり其所へ

れて人事不省と相成つた此所で助けるものがなければ此まゝ左内の一生は此所の土となるのでありましたが天の助けか此場の始終を岩蔭にあつて見て居た一人の者がありまして今曲者を追拂つたところの侍かばつたり其所へ倒れたから直ぐに岩蔭から立ち出でし左内の身体へ手を押し當て　男「お侍……確乎なさいお侍……二聲三聲呼びたしたが何の返事もありません照り添ふ月に抱き起して其顔色を見てあると齒を喰ひ縛つて眞青だてりやあもー事遲れたかと懷中へ手を入れて見ますとまだ充分の溫みがある　男「うむこやりや占めた水を一杯呑ませたいが何うも仕樣が無いこれお侍……確乎なさい中々氣が注く樣子もないから再度森かして傍らの小川へ駈け寄り腰の手拭を取り外して之を充分に濕めし又左内を抱き起してその口中へ濡れたる手拭を押しあて駈りに水を絞り込んで居ります内に　左「うーん……

うーん……と唸り出しました左内占めたと男が脊中を撫せあがら　男「お侍……確乎しなけりやあ不可ません　左「うーん……男「さ確乎なさい聲が聞えましたか山崎左内眼をかすかに見開いて初めて心吾に返り　左「や貴殿は……　男「お氣が注かれましたか確乎あさらなきやあ不可ません　左「あ難有うございますさては拙者は氣を失ひましたか　男「さあ只今那れにて見て居りますると曲者三人の處置をなすつて跡はばつたり倒れた御樣子お氣の毒と立ち寄つて呼べども答へが有りませんとりやあもー手遲れかと小川の水を掬んで來て失禮ながらお口元へ濺ぎますと稍あつての御回復何うも飛んだ目にお逢ひなさいましたなあ　左「然らば貴殿の御介抱に由つて拙者一命を拾ひしかあ辱じけないうございると左内は難有涙を落して一人の男に謝して居ります　男「なあにお侍然んな禮にやあ及びません見りやあ御病身の樣子だか之か

ら何所へお越しなさる御思召しでございます　左「よく探ねて下すつた拙者は江戸本芝一町目の山崎左内と申するもの二年以來病ひ續け滿う之までに本復いたせしが一日も早く身体自由に相成るやう箱根の名湯へ浴さんと妻子を引き連れ遥々と此所まで來たる途すがら計られたとは露知らず小田原宿の掛茶屋から道案内をすると云ふ男のあるを幸はひろれを便りにいたして此所までは無事なりしが樣子を聞けば妻子は奈はれ此身の有金を奈はんと云ふ曲者の悪計殘念無念と思ひしより三人の曲者は追ひ拂ひしがうれにて心の折れしものか御介抱に預つた拙者の身の上便りと思ふ妻子は奈はれ身は不自由の病氣上り何卒御賢察下されい涙を流して語るを聞き、男「樣子を承はれば何ともかともお氣の毒私はこの箱根のものであるが及ばずながらお力添へをいたしますから此所で落膽りなさらずに私しの宅までお越し

下さい　左「難有きお心盡しして貴殿の御名前は……　男「箱根宮の下で湯屋渡世の三河や吉藏と申しまする　左「うむさては貴方が三河屋吉藏殿で　男「お侍貴方は私を御存知で入らつしやるか　左「いや別に一面識もいたさぬが不思議と云ふのは今日の御緣寶は斯々云々で妻子諸共御厄介に相成んと存せしところ妻子に別離はいたせしが三河や吉藏殿貴殿に逢つたろれのみか一命の大恩人であつたとは何かの因緣でござらう始終を聞いた三河や吉藏聞けば聞く程氣の毒に相成つて素より心切深い男であるから吉「お侍もー旦上は決して御心配なさるゝな斯くまで因緣の深きものなれば決して他人とは思ひません私を知つた曲者なれば此山中に住居いたすものに相違ござらんから今から私の宅に永く逗留をなすつて病氣御養生の傍ら御妻子の生死をお探ね遊ばしたら宜からうと頼み甲斐ある三河屋吉藏の言葉然らば御言葉に

あまえて厄介に相成らんと斯る山中で永話しも出來んから左内は三河屋の主人に助けられあがら此所を出立いたさうとする時折よく通り掛りました駕輿昇二人　甲「やあ三河屋の旦那此遲いのに何方へお越しで　吉「誰だれと思つたら竹道金八今歸りか

兩人「へい　吉「ろりやあ何より能い鹽梅だ此お客人はな乃公が大事の客人だ切望其駕輿へお乘せ申して自宅まで屆けて遣つてくれ　兩人「へい〳〵　折よく戻りの駕輿が來たので吉藏から之れに頼んで左内は三河屋方へ無事に相着しました

さて山崎左内は駕輿で送られて三河方へ相着し程なく主人の吉藏も歸り來つて女房女中にも氣を注けさせ最と叮重に取扱ひいたしております内浴湯は自宅で濟むことゆへ日毎入浴をいし養生も充分に行き屆きましたから恰度二月も經ちますると左内の身体は殆んど本復いたしました三河や吉藏におきましては衆て

武術の嗜みはあるし至つて武張つた話しなぞを好みます衆て左内が災難の折は岩蔭にあつて其腕前を見て居りましたから此頃は左内を相手に武話武術なぞを樂しみにして其日々々を送つて居る或時亭主吉藏が　吉「左内様　左「何でござる　吉「お江戸と違つて斯う云ふ田舍の山の中へ御遊山と申した所で別に之と云ふ所もありませんが今宵は月もよし餘まり御退屈でもありませうから鹿狩にでもお慰み旁々お出掛けあすつちやあ如何でございます　左「やそれは至極面白うござらう拙者は劍道の心得だけは別に炮術の嗜みはないが貴殿かお出掛なさると云ふなら拙者も一とつお伴をいたさう　吉「砲術と云つた所で貴殿程の方であればあに又面白い獲物もでざろうから御案内をいたしませう　左「然らばお供をいたさうと云ふので主人の吉藏が火縄銃を取り出し夜に乘じて家を立ち出で松明を振り點らして箱根の深山へ

あまえて厄介に相成らんと斯る山中で永話しも出來んから左内は三河屋の主人に助けられながら此所を出立いたさうとする時折よく通り掛りました駕輿昇二人　甲「やあ三河屋の旦那此遲いのに何方へお越しで　吉「誰だれと思つたら竹造金八今歸りか

兩人「へい　吉「ろりやあ何より能い鹽梅だ此お客人はな乃公が大事の客人だ切望其駕輿へお乘せ申して自宅まで屆けて遣つてくれ　兩人「へい〳〵　折よく戻りの駕輿が來たので吉藏から之れに頼んで左内は三河屋方へ無事に相着しました

さて山崎左内は駕輿で送られて三河方へ相着し程なく主人の吉藏も歸り來つて女房女中にも氣を注けさせ最と叮重に取扱ひいたしております内浴湯は自宅で濟むことゆへ日毎入浴をいし養生も充分に行き屆きましたから恰度二月も經ちまするとと左内の身体は殆んど本復いたしました三河や吉藏におきましては衆て

武術の嗜みはあるし至つて武張つた話しなそを好みます衆て左内が災難の折は岩蔭にあつて其腕前を見て居りましたから此頃は左内を相手に武話武術なぞを樂しみにして其日々々を送つて居る或時亭主吉藏が　吉「左内様　左「何でござる　吉「お江戸と違つて斯う云ふ田舍の山の中ゆへ御遊山と申した所で別に之と云ふ所もありませんが今宵は月もよし餘まり御退屈でもありませうから鹿狩にでもお慰み旁々お出掛けおすつちやあ如何でございます　左「やそれは至極面白うござらう拙者は劍道の心得だけで別に炮術の嗜みはないが貴殿かお出掛なさると云ふなら拙者も一とつお伴をいたさう　吉「砲術と云つた所で貴殿程の方であれば あに又面白い獲物もでざろうから御案内をいたしませう

左「然らばお供をいたさうと云ふので主人の吉藏が火縄銃を取り出し夜に乘じて家を立ち出で松明を振り點らして箱根の深山へ

分け、入りますると名に負ふ深山月は高く中空に懸つて照り渡へ谷川の水は砕けて月明りにきら〳〵と流て居る草に縋り木の根によぢて兩人は山中を彼方此方と辿つて居る内に吉藏が塒所柄を定めて篝り火を焚き岩蔭に隠れて鹿笛を盛りに吹いて居る馴れぬながらも左内が鐵砲を取つて火縄を持ち妻乞聲に果かなくも火串に迷ひ寄る鹿を待つて居ると今しも一頭の牡鹿が幽かに向ふに來たる樣子　吉「左内樣來ましたぞ　左「成程……と兩人は言葉も至つて少ない武術に長けたる左内のことゆへ砲術とても左のみ拙いことはあい覘ひを定めておいて火縄を取り火蓋を切つて二つ玉遥かに手應へがいたしたから、吉「占めた左内樣さあお出でなさいと再度岩蔭を立ち出でく心當りの所へ往き手負の鹿が何所に居るかと探して歩るいて居るとては如何に太い奴もあつたものて今此兩人が射止めたる所の鹿を何者とも知らず兩

人の大男が肩に掛けて擔いで往かうとする樣子　吉「太郎奴等だ乃公遂の射倒した鹿へ手を掛けて何うしやうと云ふ心得だ　男「何うするつて笹棒奴人の物あ吾物だ御苦勞樣に動いて居る奴をすしてくれたから持つて往く左内は此方に見て居たがしつと斯山者の顔を月明りに透かして見て　左「やあ汝は何時ぞや拙者を脳ませて路銀を取らうといたした山者汝に恨みは數々あると立ち寄つて其樣髪を捕らへ突然其横顔をばかーり此方の男も驚いた振り返つて左内の顔を見ると如何にも自分達三人が路銀を取らうといたしたとき兩人の仲間は此人に切られ自分は辛くも逃げて來たのだから悪い所で出逢つたと思つたが先きがすーつと強いから仕方がない腐にさらはれた雀の如く樣髪を捕へられたまゝ縮み上がつて居ると　左「拙者は汝の命を取らうとは申さぬぞ　男「へい〳〵取られて仕舞つちやあ困ります　左「併し汝に

ちと聞ねたいことがある御うだ偽りあく白狀をするか　男「へい何なりと身に覺へのあることは……　左「白狀をいたさぬに依つては命が無いから左樣心得ろ」一人の曲者は吉藏が取り押へて居る　男「何でも宜いから白狀をして命乞をして仕舞へ　吉「駄つて居ろ」吉藏がばかーり投ぐつた　左「何時ぞや拙者が災難の砌り拙者の妻子を奪ひしは汝の兄分株とか申せしが確かにられに相違ないか　男「確かに相違ございません　左「うーむ何と云ふ奴だ　男「渦卷の次次と云ひます　左「先づ汝に聞きたいと云ふのは拙者が妻子の行方ださあ何ういたしたか白狀しろ　男「お可哀想なのは彼方樣でございます何時ぞや源次兄貴が連れて歸り自分の氣まゝに樂しまうと色々手を廻して口說いて見たが聞きません永い月日の今日まで氣まゝになれよ從へよと日毎々々に折檻して兄貴も今じやあ頭を立て今日か明日の内にやあ手込みにしても

狸戯んで何うで廻ね名女だから親子共に切り捨てると斯う云つて居りましたが何うなりましたか公乃達あ今朝から此所へ出ましたが一向便りも聞きません」之を聞きました山崎左内三河や吉藏も大ひに驚ろき　吉「左内樣ありやあ斯うしては居られません今から此野郎に案内をさして何でも宜いから渦卷源次とか云ふ奴の住家へ踏ん込み一時も早く奥方樣とお嬢樣のお兩人をお助け申さなけりやあなりません　左「へゝ能く仰しやつて下すつたそれじや之から渦卷とやらの住居へ參るでござらう　吉「さあ野郎且那樣がお情けで貴樣達の一命は助けてくれると云ふ何でも宜いから今直ぐに其渦卷の住居へ案内を仕ろ　兩人「へい〳〵畏りました」頭をべて〳〵さげて居る　吉「案内すると云つても必ず乃公達が來たことを云つちやあならねあ旨く中へ道入り込んで奥方樣やお嬢樣を助けて仕舞へば貴樣達にもそれぞれやう

美を取らせる　男「へい難有う存じます　袞美は幾干お呉んなさいます　吉「馬鹿野郎命も浮雲ねえ所を袞美が幾干だと聞く奴があるものかさあ屹度神妙に案内を仕ろ　男「畏こまりました」兩人の男に案内をさせて渦卷源次の住居をさしてまいりまする所の左内吉藏　左「これ〳〵向ふに燈火が相見える那れが渦卷の住居か　男「左様でございます　左「然うが必ず居々が來へたと源次に云つて相成らん何か其方の考へで宜いやうに案内をしろ　男「へい」道を急いで一同來つたる所の渦卷源次の住居後へ一面の岩を背負つて丸木作りの盗賊住家　男「兄貴只今歸りやした　源「山より松に一本杉か何うだ宜い鴨でも引つ掛かつたか　男「兄貴まあ一升お呉んなせえ宜い鴨つて能くねえ鴨つて大變な物を連れ込んで來やした　源「うむ何う云ふ代物だ此所へ引つ張つて來い　男「然ろいちやあ不可ません　源「大分大威張りの様だがろんな大した代

物か　男「大した代物だつて何だつて剛えもので　源「珍らしいなあ　男「眞實に珍らしうでせゆやす　源「何でも宜いから連れて來いられを肴にお前達と相手にして之から一杯呑み直さう　男「時に兄貴那の強情の阿魔あ何うしやした　源「那りやあ今夜折檻を仕やうと思つたが何だかまた今日の風模様じやあ大分乃公にでさつて來たから折檻は明日へ伸ばした　男「ろりやあ何より結構でございやす今夜はお傍にも居ない様でございませやすが何所へ投り込んでおきやした　源「奥へ投り込んでおいたが何しろまあ今夜の代物は何んだか知られねえが此所へ連れて來て見せろ　兩人「畏まりました」曲り松に一本杉渦卷の前を下つて此方へ來り　曲「旦那様　左「おー　曲「お喜びあさい奥方様やお嬢様はまだ息才で入らつしやるとでございます　吉「奥方様やお嬢様がまだ息才で入らつしやるとかうむ天の助けださあ案内を仕ろ　兩人「宜しうございます」と案

内に連れて左内吉藏むつくり立つた渦卷の前慌ろいたのは一眼の山賊之はと思つたから源次は突然山刀を抜いて物をも云はず兩人の者へ切つて掛る左内は源次の顏に見覺へがあるから此奴のために計られて小田原宿掛茶屋以來の難難を仕たかと今切つて掛つた奴を体を横にして引つ外し腕が逆つて居るから苦もなく山刀を叩き落し襟元を掴んで膝下に押へた

左「何時ぞや汝の惡計に陷り妻子を奪はれたそれのみか此身も危うき其所を辛くも一命助かつて今しも此所で巡り合ひしは互ひに取つて運不運今天罰を思ひ知らする」と左内が太刀を抜き打ちに源次の首はばつさり飛んだ此方に乾兒の一同を相手にいたしておつた三河や吉藏もー又に立つものがないから山り松一本杉の兩人を呼んで

吉「さあ奥方様とお嬢様を此所へお連れ申せ」兩人は兩人の働らきを見て懼るへておつたが畏まつたと奥へ這入つた働あつてふみ

きお春の母子を引き連れ出で來りましたあはれやおみきお春におきましては又も非道の呵責に遂ふことかと屠所の羊と歩み來たが此場の樣子を見て吃驚りいたした

みき「貴方は良人左内樣春「父樣でございますか」と兩人は袖に縋りまして絶へて久しき對面に涙は盡きぬ此場の有樣頓て左内は涙を拂つて

左「宜くまあ兩人共に無事で居て呉れた話せば長いことであるから此所を一まづ引き上げて乃公と一緒に來るが宜い」と盗賊の住家で話しも仕て居られんから三河屋主人と共に妻子を連れ戻つて山崎左内吉藏に一伍一什を話してあるから妻子の者に改めて對面をさせ茲に夫婦親子巡り合つて奇遇を喜び暫時三河や方にあつて滯在をいたして居る

する内に山崎親子三人は此三河や方へ滯在いたして居るのもー二年近くに相成りました何時まで親子頭を揃ろへて厄介にば

かり相成つて居られませんから左内は思ひ付いて乗て自分が研究したことのあるを幸ひ易學を利用してせめて妻子を養はんと或時三河や主人に此事を相談して見ると主人も之に賛成しましてそれじやあ恰度今江戸から來て養生をなすつて居るお客樂があるが毎度非のお相手をいたして懇意であるから此んな所で左内様易者を始めなすつても仕方がない乃公が此お江戸のお方へ頼んで見ますから一旦江戸へお歸りになつて江戸は繁昌な所ゆへ江戸で辻占なり何なりと稼ぎなすつちやあ何うでございますと云ふから左内は大ひに喜び主人吉藏から此ことを話して貰ふ其客人と申しまするは元雲州雲出郡錦織の里で錦織某と云ふ方の次男卯兵術と仰しやる方であるが此方は若氣の心得違ひで國を出奔いたし諸國を流浪して當時八丁堀岡崎町に夫婦暮し左の み樂な暮しではありませんが癇癪のために此宮の下へ來て浴湯

をいたして居る卯兵術は亭主吉藏から斯々云々と話しを聞いて卯そりや何しても お氣の毒のこつた私しも江戸岡崎町と云ふ所に住む位いで別に暮らし方の宜い理由ではないが其左内殿とやらが借屋をいたして辻占に出たいと云ふ位いのことあら何うとも心配して上げませう幸はひと私の病氣も大分治つた様だから御亭主私も一應其左内殿に過つて一緒にお連れ申しませう」と云ふから亭主吉藏が左内夫婦を此卯兵術に引き合せ互ひに懇意を結んで然らばお連れ申しませう御厄介を願ひますと云ふので山崎左内夫婦は永らく逗留して厄介に相成つた禮を述べ錦織卯兵術に連れられて江戸八丁堀岡崎町ある卯兵術の家へ若し此所で兩三日世話に成つて居る内に卯兵術が與力町の裏住居ではあるが一軒の借家を借り受け二三の裏所道具あをも分けて呉れましたから左内夫婦は此所へ引き移り親子三人は最睦ましく良人左

内は夜毎辻占ひを業といたし妻のおみきは人の針仕事などをいたして居る夫婦共稼ぎで晝夜分ちなく一年半ばかり稼いで居る内に少しの貯へ金も出來る樣に相成つたする内に左内におきましては成手堅に出つて土御門の御門家と相成り易學の指南をいたし裏長家にも居られませんから卯兵術の近所へ一軒の家を買ひ受け此所に住居をいたして名を渡邊左京と改め五六月も經つ内に左内事体易學に達し萬事取扱かひ等も器用であるから土御門御役所より此度關八州の陰陽師組頭御役錢取立役仰せ付られましたにて二三年精勤いたしまする内に寛政三年亥十一月左京は陰陽師取調べの儀を寺社奉行板倉周防守殿へ願ひ出でましたところ板倉周防守殿から松平左京亮殿へ渡りをつけ御吟味の上にて之を差し許し願ひの通り仰せ付けましたから左京喜んで陰陽師取調べの儀を相果し之が終りました時板倉殿左京に向つ

て　板其方は辨舌といひ形ちと云ひ名とは大に違つて居るがだうだ左京以後は大膳とか帶刀とか云つたが宜かろう」面白い板倉殿の仰せ左京は此所で再度渡邊大膳と改名いたし陰陽の道に心を委ね益々精勤いたしてありまする内に土御門御役所より如何ある都合かいたしまして渡邊大膳に金子三百兩御用金として仰せ付られましたけれども中々陰陽師位ひの身分で斯る大金が容易に出來る理由もございませんし仕方があいから此儀お斷りを申上ると達て如何なる都合でもして調達いたせとの御役所の仰せ大膳之には當惑をいたし種々それべき工面におよびましたが到當三百兩といふ大金が調りませんし是非もないから今度はきつぱり御斷に及ぶと御役所からは寺社奉行へ相屆け又大膳からも一應寺社奉行へ御屆に及びまして自ら出頭の上委しく申し開きをいたしましたが奉行においては御吟味の上兎に角土御門御門人

として其後所から申し附けたる所の儀を違背いたしたは大膳の不都合とあつて深くもお咎めを蒙ひり江戸排ひを仰せ付けられました大膳心中に歴制極まる所行をするとは思つたが上の威光だから仕方がない折角此までに相成つたる所の世帯を畳み家財諸道具其外共殘らずまとめ香取相摸と云ふ自分の門弟にて香取大神宮の神職へ預け其身は妻子もろとも神奈川表へ引き移り門弟岡本友雄と云ものを頼んで又々渡邊帶刀と改名いたし暫時茲に身を隱くして居りましたが或時先祖へ墓參りのことを思ひ付き類りに江戸へ出たくなりましたから帶刀一人姿を替へて江戸表へ忍び來り山崎家の菩提寺へ參詣をいたしまするとあたかも此日彼香取相摸も帶刀は師匠のことであるからせめて江戸に居るのを幸ひは山崎家先祖の墓詣でだけもいたしておかうと來て居たからばつたり逢ひました

相「やあ師匠大膳様じやあでございませ

んか　帶「おゝ香取相摸か何うして此所へ來て居つた　相「されば貴方が當地お咎めの身とありましてより私は當江戸に止まりして幸はひせめては貴方に成り替つて御先祖様方への墓詣でだけもいたしておかんと本日一寸斯くの始末　帶「左様であつたか何時に變らぬ其方の志厚とけあい就ては拙者も神奈川表へ引き移つてより渡邊帶刀と改名いたして相變らず陰陽師はやつて居るが何うも先年の大病以來時々癇癪と云ふ奴が起つてならん　相「左様でございますかそれじやあ貴方は當時渡邊帶刀様と仰しやいますか　帶「おゝ……何うも今日此江戸へ立ち越へたはよいが癇癪が起つたものか類にり腰の邊りが痛み出して困る　相「そりやあ嘸お困りでございませうもー御墓參も濟みましたらうが如何でございます折角江戸へお立ち越えに成つて時も時と此所で出逢ひましたのは盡きせぬ御縁癇癪が起つたとあれば何のこと

切望私しの宅へお立ち寄り下すつてせめては疝癪の治るまで御逗留なすつては如何でございます　帶「難有く思ふが何を云つても當江戸はお咎め多き拙者の身体萬一や役人の目にでも悪つては相成ん　相「併し乍ら帶刀様も一此通り日暮ではございまするし況して此所まで忍んでお出でなすつた以上は私しの宅へお立ち寄り下さるともお差支へはありますまい相變らず醜るしい住居ではございますが切望之からお立ち寄り下さるやう」師弟の間と云ふものは楽しひもので相模が頻りに云つて呉れますから帶刀も然らば全道いたさうと八丁堀松屋町の香取相模の宅へ來り種々叮重なるところの待遇に預りました兩三日逗留して居る内相模におきましては何か用事がありまして一寸留守を帶刀に相頼み何所へか用達しに出掛けましたすると其留守に崎山兵右衛門と云ふ一人の侍がまいりまして　兵「拙者身の上の判断を願ひ

たい」生憎相模が留守でありますから渡邊帶刀　兵「折角の御入來でございますが香取相模てと只今留守にでございますれば何卒後刻にてもお出での程を願ひます　兵「いや別に主人であくとも構はん貴殿は當家の御人ではございぬか」云ふから帶刀ひよつと氣が注いて易を占ふならお手の者だ相模を名指しで來たのでなければ師匠の乃公が見てやろうと思つたが高搗らない　帶「私しは此相模の門弟でございます　兵「左様でございるかいや御門弟樂でも別段如才はないであうら御面倒ではあらうが一とつ占つて貰ひたい　帶「それでは私しでも宜しうございますかお言葉に由つて占ひますから切望此方へお上り下さい」一間へ通して手の筋から筮竹を取つて考へたが元より得手の道であるから崎山兵右衛門が身の上前後の吉凶に至るまで全然掌をさす様に判断をいたました兵右衛門は大ひに感心をいたし　兵「や誠に御熟達の程恐

れ入つた伺伴平内と申するもの序でに御判断を願ひたうございれば早速之へ通はしますから御面倒ながら願ひたい兵右衛門は感心したから吾家へ立ち歸つて早速伴の平内と云ふものに話しをすると平内も此所へ通つて來たが帶刀の判断悉く意中にある様にあたるから感心をして立ち戻り親子話しを仕合つて帶刀が易道に達したことを譽め合つて居たが何時しか崎山父子のものと帶刀懇意に成りまして身の上のことを話しをすると兵右衛門兵「如何様左様あ方であらうと拙者も兼て察し申した當時は御承知の通り寛仁の御政道一と通り御遠慮申せば何時まで御遠慮にも及ばぬことお心置きなく御逗留あるやうに」と懇ろに云つてくれますから帶刀も此所で考へ直して江戸は元より住み馴れたとお咎めを蒙むつた身であるがもー揚はぬことだらうと神奈川表から愈々妻子を呼びよせて暫く相模の家に厄介と相成つて居

る此方は崎山兵右衛門深く帶刀が易術に感服を致し或時悴平内を呼んで兵「何うだ平内那の帶刀と云ふ陰陽師は乃公の眼では器量中々勝れたものと見ゆるが其方は那れを何と思ふ平「如何にも父上のお目金通り彼今陰陽師こそ致して居るが全く彼の云ふが如く以前は天晴なる武士にして一廉の役にも相立つ人物と存じ候兵「予も然う存じて居るが天晴れ彼の如き武士が陰陽師を渡世をさして置くは惜しいものの彼の如きものを抱き込んでお屋敷へ差し置きあば正逆の時に吾やが片腕と成るであらうが何うだ其方より委細を殿様へ言上して何とか方便を巡らして見ては平「宜しうござる拙者殿へは宜しき様に言上いたしまするに由つて父上は何卒彼をお誘き進め有之やう」崎山親子の者が帶刀に惚れ込んで深切にも色々と申してくれますから渡邊帶刀再度武家

奉公をいたす樣お心に返りまして崎山兵右衛門は當時神保家の家老職此人の世話に由つて帶刀は遂に神保右京殿の屋敷へ勤める樣なことに相成り頃は寛政の五年八月廿八日お屋敷へと引き移り知行高五拾石に五人扶持を玉はりましたが素より松平和泉守樣お屋敷にあつて重役おも勤めし位いの山崎彦作でありますから武家方の法式は云ふまでもなく其外萬事の心得がありますから神保右京樣のお心に叶ひ日ならずして御用人を勤める樣に相成り則ち山崎彦作義明と名乘りまして其年の九月の末つかた五十石の御加增を下しおかれ都合百石に五人扶持彌々出精怠りなく殿樣のお覺の目出度ことゆへ十月の上旬には家老役を仰せ付られまして又候五十石の御加增を仰せ付け下しおかれましたから彦作無有くお受に及んでおいて申し上ふやう　彦「私儀は格別の厄介も之なく是まで百石を頂戴いたしおれば暮らし方とても何の不自由も無之候然れば何卒小祿にて厄介多き者へ右五十石御割付け御加增下しおかるれば難有き仕合せに存じ奉つります旦御受けに及んでおいて五十石の御加增は返上いたしますと二へしからば殿樣においても御道理と思召され早速右の五十石を徒士格足輕体のものへ割り付け下しおかれましたが彦作斯う云ふ心意氣でございますから上は左京殿初め下足輕体に至るまで自づから彦作の身を重んづるの有樣でありますが喬木却つて風に折らるゝの譬へ彦作遂に計られて非業の最後を遂げると云ふのお話しは次席

第四席

山崎彦作は相變らず精勤いたして居りまする或時お屋敷の庭前において庭を眺めておりましたが名花珍木も大き内に此彦作が

餘念なく見惚れて居りました。たのは一本の松の木根は二尺六七寸廻り位いにて長さ二間半ばかり實に木振り面白く彦作は之を眺めて居ると何時の間にか其所へ右京殿がお立ち出でになつて此体を御覽になり　殿「彦作酷く其松の木が所望と見ゆるぞ」突然にお聲が掛つたから驚ろいて飛び退り　彦「はゝつ恐れ入つてござります　殿「いや何も恐れ入ることはない何うじや彦作其松の木を其方が所望とあれば予は其方に遣はすが其方はそれを何といたす　彦「餘まりに名木と存ぜしゆへ遂に見惚れて居りましたか　殿「さあされば其方に其一本を遣すかお言葉の程恐れ入ります　彦「辱しけなう存じます之程の名木頂其方は之を持つて往くか　殿「出來るとあれば後刻人夫共を召し連れまして　殿「さあ此松の木は遣はすか後刻人夫を持つて携へ歸ると云ふことはまかりならん只今之にて其方が持ち返れ　彦「はゝつ」と云つたが年來植付

の松の木二尺五寸廻りもあらうと云ふのだから根が相應にはこうつて居る一人で拔いて持つて往けと無理の仰せであるから彦作も之には迷惑いたしましたが元來大力の彦作てりやあ殿樣が拘者の力を試めさん爲めに此名木にも拘はらず與れるから持つて往けと仰しやるのだ自分一人では拔いて持つて往くことが出來ないからと云つて御辭退するといふのは卑怯の至りよし〳〵此所だ一番大力を出して殿樣を吃驚りさしてやらうと彦作心中に考へましたてとゆへ一禮に及んで名木の松へ立ち寄り兩手を其幹へ押しあて再度三度搖すつて居つたが頓て体を寄せて兩手を掛け全身の力を出だしてゑーい〳〵と二聲三聲掛けましたがては如何に松の一木を大地より物の見事に引き拔いて其所に立つたる彦作右京殿が莞爾お笑ひに成つて　殿「彦作天晴である　彦「難有く頂戴仕つて立ち歸りますとお聲が掛つたのを機會に

ると松の一木を荷つたまゝ庭の裏門を立ち出てゝ吾家へ歸り之は自分の庭へ植へましたが此度のことが悉く右京殿のお氣に召して又候五十石の御加增がありましたから此所で都合百五十石に相成り崎山兵右衛門と同格にて只管に勤務いたして居りまするする内に此方は崎山兵右衛門年は取るし追々と勤務も難澁に成りましたから老衰のため御役御免下され度旨御願ひに及びましが殿樣之を聞こし召して如何にも兵右衛門は老衰いたした今は山崎彦作と云ふものがあるから彼は意のまゝに聞き届けて遣らうとの仰せてありますす其所て彦作が兵右衛門の跡役を仰せ付けられ兵右衛門の倅平内が彦作の跡役を仰せ付かる樣になりましたが之が彦作の運不運兵右衛門から御仕法帳勘定元締役其外の事を受け次ぎましたから彦作早速にろ〳〵取り調べて見ると凡そ一か年の納り高と云ふものが金納にて七千兩内外てあり

ます其所て一か年間の支出高を取り調べて見ますると金二千兩にて臺所入用は澤山金千兩にて家中の渡り物は澤山外五六百兩が餘時の入用都合四千兩と見積つても納め高が七千兩もありますとゆへ殘りの三千兩と云ふものが取り置いてなければ成らん然るに其三千兩某と云ふ金子の行く方が分らない御用受け次ぎの際であるから彦作大ひに迷惑をいたして右京殿へ此旨言上をいたしますると殿も大ひに驚ろきまして別に人を選み之迄の書類から諸帳面悉く其調べに掛らせ猶又崎山父子の生活分限等に就て深く探索いたさせて見ますると兵右衛門てと町屋吸六ク所に貸金四千兩御在所近邊に玄米店三軒と云ふもの町人の名義にて商賣をいたし居る由内密に探索が行き届きまして委細の樣子を右京殿へ申し上げましたが此方は早くも崎山父子何者とも知れず殿の耳へ入れたと云ふことを聞き知りまして大ひに驚ろ

き父子共に膝を交へて　兵「拙者罪障があればこそ名もなき陰陽師を取り上げて一方ならず目を掛けしも切望なしたる罪縁を謝はせんが爲めなるに其甲斐もなく此度計らず殿のお耳に入つたと云ふは何共以つて殘念の次第何者が斯る探索をいたしたか平内其方の考へでは何う思ふ　平「仰せにございます拙者いろ〳〵と手を廻して之を探りまするに抑も家中に此丈の罪を犯ぐるものは一人も無之父上ひよつといたしたら飼犬に手を噛まるゝと世間の譬へ那の山崎彦作の仕業にはござりませぬか　兵「乃公も彼奴とは存せしが元來彼に目を掛けて此まで取立てまいりしは斯ることの無からんためと何うか惡事を隱さんと味方につけしと思ひしが謀ると思つて彼奴に謀られ今は舊惡露見に及ぶ犬侍の彦作奴近頃上の首尾能けれど一旦は有る吾が恩義ろれを忘れて拙者が惡事を發きしとは奇怪千萬此まゝ彼を捨ておいては後に

悔むとも詮方なし平内殊に寄つたら彼に愛目を見せやうではないか　兵「如何にも父上の仰せの通り憎くきは山崎彦作一旦父上の恩義もありながら却つて御身に害をなすと云ふは遁す〳〵も犬付彼奴如きをおめ〳〵と生かし置いては拙者等父子は云ふに及ばず餘人に對しても邪魔な奴如何にも彼奴を引き捕らへて辛き目を見せませう　兵「うむ能く云つて呉れた然らば汝は出來ぬ折柄であるから早速其手續を相談いたさん」と父子共に考へ違ひをして居るがそれは知らない此所が事の誤りで崎山父子におさしては日頃同腹の押領私慾の家來北川口嘉作岸上主膳鹿島藤兵衛高橋七藏宮島次兵衛山角平角奈良原將監右の徒を密かに呼びよせて兵右衛門　兵「さて各自も已に聞き及んだであらうが此度密事露見の一條に就て拙者種々に手を廻して探りし所何うも家中にそれと云ふべき人もなく怪しいのは彼山崎彦作であると

段々様子を探ぐつて見れば彼奴年來の恩義を忘れて正に謀叛を發いた様子明る奴を生けおいては拙者のみならず餘人へ害し此後如何なる害をなさうも知れず出つて此度彼奴に憂目を見せんと存ずるが、各自如何思はるゝか」と兵右衛門が話しを聞いた一同の侯臣奸者異口同音に蒼作の樂道を侯み且つは後來生けおいては吾々の身の爲めにならぬ奴ゆへ此度彼奴を亡きものにいたさうと云ふ滿場一致の決議であります　兵然らば各自方の思召も拙者の考へと異ならぬか斯く同意いたせし上は一日も早く彼奴を殺めて仕舞いたいが何と能い考へはでさらぬか」一同腕を組み小首を傾けて居つたが稍あつて川口嘉作　嘉「何うも並大低のことつて彼奴を討ち取らうといたしても劍道熟達の山崎蒼作吾々の腕が立つものでないこれは深くお考へをあすつて二度目で確乎と腹はりはぬやうに謀りでとを回らさなければ相成らん　兵如何にも貴殿の云ふ通り何を申すも相手が劍道の達者で有からこやあ何うしても深い謀りでとを設けなければ相成らんが各自之へ膝を進められよ」一同の者は額る集め其夜は崎山家の奥の一室で密談數刻に渡り漸く謀計の出來いたしたものか深更散々に別れました

此方は山崎蒼作相變らず右京殿のお氣に入りで精勤いたしておりましたが此度帳面取り調べの一條から自分の恩義ある崎山兵右衛門が惡事露見に及ばんといたしたから　蒼「あー何うも困つたことが出來いたした殿の仰せに據ろあく帳簿の過失を見出し届け出でしが基となり拙者が從來の恩義ある崎山父子の罪露見に及んで今にもお咎めのある那の親子拙者兵右衛門殿の財役引き受けたることなれば恐らくは兵右衛門殿の心中では拙者が其罪を發いたと思召して万一やお咎めのある節は拙者を正

しく恨むであらう斯る際に相成れば拙者は恩義ある兵右衛門殿に對して濟まぬ道理心苦しけれども之は一旦今の役を辭退して兵右衛門殿の前もあることゆへ一度屋敷を引き退がらうと抑う考へましね山崎彦作直ぐに殿の機嫌を伺つて以つて重き思召しにより役柄を蔑むり奉つりしてと冥加至極難有くは存じ奉つれども元來年久しく我まゝに世を過ごし殊には病身の儀に有之候間恐れながら此度お暇下しおかれ病氣保養仕り度此段御聞き届け仰せ付け下しおかれ候はゝ難有き仕合せに存じ奉つる」と御願ひに及んだが元より右京殿は御自分の一存程に思召しておらるゝ彦作のことと其後次けて再三言上いたしましが遂にお聞き届けもなく追て當方より差圖いたすとありまする彦作是非もないから何らしたら宜からうと樣々に心を碎いて居る頃は十月廿三日のことゝ崎山兵右衛門方より使ひあつて兵右衛門

て老衰恩勞のため聊かの酒宴を開らき是非共一献を差し上げたいから今宵御足勞ながら御入來下さる樣と使者の趣幾ら易を見ることが旨いと云つても自分の身の上は知れない彦作難有く承知して使の者を歸し　彦「みきや今日兵右衛門殿から拙者に一杯御馳走すると云つて迎ひに來た乃公は夕方から崎山の屋敷へ往つて來うやと思ふが何分酒宴のことゆへ歸りの程は遲くなるかも知れん其方はお春と待ち詫るであらうから先へ寐ても構はんもー直に日も暮れるであらうから往つて御馳走になつて來る女房おみきが　みき「左樣でございますか兵右門衛殿もお話しを承まはると此頃ではお氣の毒のお身の上これは私しだけの考へでございますが萬一や貴方が那の樣な取り調べをいたした袋めとお恨み遊ばして居るのではございませんかろれにしても今宵の御馳走と云ふのは何共私しは心得ません　彦「乃公も其

所へ氣が注いたから此間中から度々と殿へも申し上げて御役御免を願ひ上げしが一向殿においては聞き入れなきゆへ據ろなく出仕いたして居る氣の毒と云ふのはまことに崎山父子の身の上今日か明日にはお咎めがあるだらうれを知つて今宵の酒宴に往かぬと云つては却つて大恩ある兵右衛門殿に對し拙者は疑はるゝばかりであるゝゆへ拙者はまかり越して兵右衛門殿にも熟談いたし或は疑はれて居る所の拙者の身を清めて歸る心得日が暮れたら往つて來るから久八を外へ出さぬ樣にしてくれ〳〵みき宜しうございます兵右衛門樣から受けました恩義は恩義でございますが素より那れ程の仕事をなさるお方何う云ふお心得違ひをなすつて入らつしやるかも知れません隨分御注意なさいましてお早くお歸り下さいましな　彦「うむ其考へも道理だが乘ては拙者に目を掛けられし兵右衛門殿拙者の意中を知らぬ上は兎も

角も之迄交際來りし仲なればお左樣な不心得をいたしはすまい何ば兎もあれ往くことにしておかう頓て其日も夕方に相成りましたから山崎彦作は支度をいたし供の久八を召し連れ程遠からぬ岡崎町崎山兵右衛門の屋敷へとまいりました

此方は兼て計つてあることゆへ崎山父子町重に彦作を待遇して頻りに酒を進め彦作も充分醉つたと思ひました頃取次の者が

取次「えー申し上げます　兵「仙じゃ　取「只今山崎樣より先生の迎ひにでございます彦作之を聞いて　彦「おー何か拙者を迎ひに參つたものがあるとか何う云ふ用事であるかお取り次ぎ衆御苦勞ながら聞いて下さい　彦「畏まりました」取次の者が立つて往つて暫時經つと　取「山崎の先生へ申し上げます……お屋敷においては殿樣御急病のよし急ぎ先生に御出仕有之樣との御達しゆへお迎ひに參られました山にでございまする聞いて驚ろいた山崎彦作　彦

何に殿様御御氣とか如何いたしたことであらう宜しうござる早速歸宅いたすと云つて迎ひの者を歸して下さい　取「畏まりました　彦「や時に兵右衛門殿時ならぬ刻まで御邪魔をいたして相濟まぬ只今それにて聞きの通り殿御急病の由に候へば失禮ながら拙者は之にてお暇をいたす　兵「拙者も殿の急病ゆへ全く道いたし度とは存ずれど何を云ふにも御承知の身の上貴殿より宜しう言上の程相頼む　彦「宜しうござる折もあらば拙者殿に言上いたして屹度貴殿のお詫を申へ宜きなお取成を仕つるどれお暇まをいたす　平「左様なればもーお立ちなりでござりまするか御懇意づからの事ゆへに今宵は御一泊も如何はんと存せしに殿の御急病とはいたし方なし又明日にお目に掛つて緩りとお話しをいたしませう　平「内は酒が強い上に腹に一物あるから酔つて居ない表て門から山崎彦作を送り出すが早いか座

敷へ戻り　平「父上留守をお頼み申す彌々今宵彼奴を殺害いたしますると逸早くも仕度に及んで鉄を押つ取り乘て謀つてはあるが萬一や一方が道り損なつた時の用心と庭の切戸口を忍び出で其まゝ間に紛れて仕舞つた

山崎彦作供の久八は提灯を提げて先に立ち出でました山崎彦作に遣つて來る恰度三間巾ばかりの道で一町ばかりの間と云ふものは右が一帶の石垣で左りは黒い板塀が立つて居る　久「且那様今夜は何時におく御酩酊の御様子でありますがお浮雲おうでさいまするからお氣を注け遊ばせ　彦「久八心配いたすな酒は呑んでも山崎彦作石につまづいて投げられは致さんあつはゝゝやてりやあ冗談どころじやあない今も今とて殿様の御急病何う云ふ御容体かは知らないが何うも拙者を呼びに寄越す様では普通の御病氣とは思はれん早くお屋敷へ參上いたしたいものだ」と黒塀

の傍を三尺ばかり放れて久八の跡燈灯の火りを使りに遣つて來ると何者とも知れず黒塀の中でやつと掛け聲がすると同時に塀を突き抜いた鎗が二本一本は提灯を持つて居た久八の手をかすつたから久八驚ろいて逃げ出して仕舞ふ間ながら彦作が遂かして見ると一本の鎗先は直ぐ自分の前にあるさてはと思つたから足を踏み止めて体を捧へ腰の一刀を抜いて見ると驚ろいた兼て計られてやられたこつたから目釘を抜いて仕舞はれて刀の柄はかりがひよつと取れた　彦「さては曲者つ何の意趣あつて斯る狼籍をいたす」と隙さず差添へ手を掛けやうと致した時又突き出した一本の鎗彦作が左りの足の太股へぐさと突き通つたあつと云つてたぢ〳〵といたし所を又一本脇腹深く突き通つたから堪らない　彦「殘念……」と聲を發したまゝ劔道達者の山崎彦作が其所へ倒れる此時黒塀の上へ半身を現はしたのが川口嘉作塀の上か

ら彦作の急所を覗つて一突き流石の彦作も數度の痛手に到當夫にて息の絶へたる樣子彦作は當年三十八歳に成りましたがかゝる非業に倒るゝとは又是非も無き次第でありまする

此方は山崎彦作が留守宅でございます妻のおみきにおきまして

は此頃兵右衛門の惡事が知れ愈々良人彦作を恨むるよしを聞いて居りましたから今宵彦作が出て往つた跡も切望何事も無くつてくれゝば宜い間違のないやうにと獨り狹き胸を痛めながら良人の歸りを待つて居る内に夜は段々と更けて來る　みき「もー夜も大分に更けた樣子だが旦那樣は何うした事であらうよもや間違は無らうが時節柄とて案じられて堪らない酒の馳走にあるものだから歸りは遲いかも知れないゆへ先きに寐て待つて居ろとのお云ひ置きだが何うも今夜は苦になつて眠られないそれに何だか今になつて頻りに胸騒きがして來たがひよつと虫が知らせ

ると云ふ樣なことでもありは仕ないか久八を付けてはやつた樣の者の那んなものがいざと云ふ時の役に立ちやうもないけれども萬一やのことでもあつたなら先に飛んで來て知らせてくれる位いのことは出來るだらう何うも氣になつておらないが少し起きて待つて居やう」と女房おみきにおきましては驚く胸を押し鎭めて良人の歸りを待つて居るすると表の方からばた〳〵と云ふ足音が聞えてどん〳〵戸を無茶苦茶に叩く者がある折も折時も時でありますからおみきが飛び立つて

みき「誰だい……

何の用事だい

久「御新造さんまあ大變でございます早く此所を明けて下さい云ふからおみきも驚ろいて

みき「おゝ久八か今も今とて案じ過して居た矢先旦那樣は何う遊ばしたんことに成りまして私しと二人で歸つて來ると闇から突き出された鉉先きに私しは提灯を振落して一生懸命に逃げて來ました

が旦那樣は何う遊ばしましたか多分合點はもー……

みき「ゝ久八妾を其場へ案内しておくれ」と女ながらも彦作の妻おみきにおきましてはなげしに掛けたるところの長刀を押つ取り久八を前に立つて彦作が災難の場所へ駈け附けたが彼時早く此時遲しでもー彦作は非業に果てゝ四方に何の影もないおみきは彦作の死骸へ取り縋つて

みき「もー旦那樣お心を慥かにお持ち遊ばせ……私しでございますみきでございます……今日お出掛けの其折に虫が知らしたか頻りにお止め申すも聞かず劍道達者の貴方樣が計られとは云ひながら闇々打たれしとは情けない敵ろれとは確かに知れて居りますれば乾度恨みを晴らします切望斯うなりました上からは心おきなく御成佛をなすつて下さい」と死骸へ縋つて泣いて居る此時崎山の家中にあつて川口嘉作はもー大分時も經つたから彦作の死骸

は何うなつたか密かに樣子を探ぐつて見やうと出掛けやうといたしたがいや〳〵生中ろんな所へ立ち寄つて下手人と知れて仕舞つては成らんろのまゝ吾が家へ立ち歸り崎山の家中では何喰はぬ顏でおります

おみきは泣く〳〵其人彥作の死骸を吾家へ引き取り此上は油斷もなり難いと夜は更けたが燈火の數を殖やし用心堅固にして居りまする と此頃夜中見廻役那道を守る所の侍がある今石田五郎助と云ふ侍が此役を勤めて居て此所を通り掛り何うも只あらぬ樣子であるから山崎の家へ這入り來つて樣子を聞き取り石何してもそれは氣の毒の至りである併し今晩のことは今荒立つても仕方がないお心解かに待つてあればいづれ追々と事も相分り申さん」と頻りにおみきを宥めましたからおみきにおいても此方の言葉に從ひ其夜は事穏便に相濟みましたがさて何う考へても

殘念で無念で堪らない故に良人彥作が敵を打たうと云ふ心起りまして之から種々困苦の上首尾能く敵を打つと云ふ講談に相成ります

第五席

却説山崎の家におきましては大黑柱の彥作が前席述べました樣な非業に果てましたから此上何うすることもなりません仕方がないから兼て知つて居るところの香取相摸へ委細のことを相話して今では相摸の家へ全居いたすことゝ相成りました相摸におきましては香取神社の神職を勤めておりますことゆへ當時南傳馬町二丁目へ住居をいたして社樓を奇麗に飾り立て專ら周易占考のことを家業といたし此所へおみきお春を引き取りまして日々商賣も繁昌して居るお春におきましては此時十三歲母のおみ

きと果敢なくも其日を送り敵は正に崎山父子と知れては居るがまだ敵打ちを仕やうと云ふ折でないから只管時の至るを待つておりますすると此柏模の許へ來る浪人体の武士で時々易學のことを研究したり和歌のことを話し合つたりする者がある名前を辰井新助と云つて之は手裏劍の名人でありますす成時相變らず相模の許へ來つて和歌の話しなぞをいたして居ると奥の一間で頻りに琴を調べて居る樣子　新「相模殿何時になく琴の音が聞ゆるが那れは當家で調べて居らるゝのか　相「左樣でござる近頃拙者縁者の者を引き取つて全居をいたし居るが彼はお春と云て當年十三歳の少女はんの慰みに琴なぞを調べさせまする　新「いや琴は外の鳴物と違つてまことに優しき音色のもの苦しからずは拙者一曲調べを拝見いたしたい琴の調べを所望されましたから相模も承知いたしてお春に此ことを話しまするとお春も快よく承知

をいたし其日辰井新助の前で琴を調べて居るとちう〳〵頻りに鼠の泣き聲がする新助が向ふを見ると梁の隅で二三の鼠が琴の糸を喰へて頻りに取りつてをいたして居るお春も恰度一曲を仕舞つた所で之を見ると此有樣　春「あー那の糸は大事の糸だが憎い鼠だこと……子供だから人前ではあるが立つて鼠を追はんとする新助が　新「まあお待ちなさい私が取つて上げませう何をするかとお春が見て居ると辰井新助傍へおいた所の一刀を取つて小柄を引き拔き立ち騒いで居る鼠を覘つて殺止と打つたきうと云つて一匹の鼠が小柄を背負つて其所へ落ちる琴の糸もそれへ落ちた　新「やこりやあお座敷を汚して相濟まんと琴の糸と鼠を拾ひ鼠は拾てゝ仕舞つて琴の糸をお春に渡した感心いたして見て居たお春侍のすることを見て考へた刀の小柄を取つて覘ひを定め殺止とばかりに放して驚たく内に鼠一匹を打ち落しては

立派の腕前父は佞臣の爲めに非業の最後を遂げまだ其恨も晴れぬ今日此頃頓ては敵打本懐の日もあるだらうがさて敵打と云ふ奴が武術を知らなくつては中々難澁てりやあ斯う云ふ名人に見知られたのは幸ひである相摸に一つ話しをして此人の門人と成り手裏劍の道を覺へておかうと賢いからお春は直ぐに考へた翌日重ねて此辰井新助が相摸方へまいりました時相摸から話をして指南を頼むと辰井新助快よく承諾いたしてくれましたから早速其日から習ひはじめ一と月あまり稽古いたして居る内に手裏劍の方は充分手練に及び此外田宮流の小太刀も稽古をいたして之も可成りに遣ふ樣に成りました時に此辰井新助は折惡しくも國元へ用事が出來て歸國いたして仕舞ひましたお春は云ふませもなく母のおみきも相摸諸共殘り惜くは思ひましたが仕方がい。

此方は崎山親子におきましてはもー自分の屋敷にも居られませんから一同相談の上で其晩の内に屋敷を引き拂ひ麻布芋洗坂に江上觀柳と云ふ知己のあるを幸ひ此者へ便つて從つて委細を話すと此江上觀柳なるもの又一通りの惡者では有りませんから宜く然う云ふことを仕て來たと云はぬばかり早速近邊に然るべき借家をいたして遣り茲へ崎山一家の者を住はせました。

さてお春は辰井新助に從つて手裏劍小太刀の遣ひ方を覺へましたがまだ〳〵此んなことでは滿足いたしません何うかして宜い師匠を頼みたいものだと思つて絶へず此話しを相摸にいたして居る相摸も色々と心掛けて居る内に能く恭の相手をする劍持長藏と云ふものがある或日此長藏に話しをして見ると　長「今麻布芋洗ひ坂に江上觀柳と云ふ人があつて私は宜くは知らないが兎に角撃劍の名人だそうだが此人なれば手練きがあるから一とつ

話しを仕て見やう云ふから何んにも知らぬ香取相撲相「うれは難有いうれしやあ切望本人にも話しを仕て見るから何分にもお世話を願ひたいと相撲がお春親子に話しをすると今度はおみきも一緒に劍道の稽古を仕たいと云ふからそれじやあと云ふので早速劍持長藏へ話しをする長藏は何所へ何う頼んだか忽ち相談が出來ましておみきお春の兩人は此所で江上覩柳方へ弟子入をいたし劍道稽古をいたして居る内に覩柳先生考へ次第「覩何うも今乃公の許へ劍道稽古に來る兩人の母子は那りやあ確て崎山親子から聞いた山崎彦作あるものゝ妻子であらうして見ると今那の兩人が此所へ劍道鍛練に來ると云ふのは一つの望み那の崎山親子を探し出した時に父良人の仇と名乘つて打つて出る下心であらう此の間崎山父子からは身を寄せられて斯々と云はれ其住家を拵らへて遣つた計りであるに日もあくうれを敵と覩ふ山崎彦

作とか云ふものゝ妻子が矢つ張り乃公を便つて來ると云ふなあ面白い此所で今乃公が一口云らして斯々だと崎山の方へ云つて仕舞へば那方の身体は安泰で此方の苦勞は水の泡と成るのだかうして仕舞つちやあ事は壞れだ那の母親の樣子を見ると年は取つたがまだ〳〵殘りの花櫻てりやあ一つ此所は之丈け呑み込んでおいて崎山の方と道を絶ち女に云ふこと聞かしておいて又何とか一工夫をいたさうと奸智に長けた江上覩柳或時おみき母子に向ひまして「さて貴方やお兩人も斯うして毎日遠い所からお出でになるが何うも放れて居つたのでは往來の間に暇を潰して思ふやうに稽古も出來ん就ちやあ私しの方も別段氣遣ふものもあいから當分の内私の家へ引き移つて居て充分御稽古をなすつては何うだ兩人揃つて劍道を研かうと云ふは何か大望があつての事であらうがうれは拙者が問ふところでない唯それに不

覺を取らぬまでには及ばずながら拙者何分にもお力添へをいす何うです此方へ引き移つてせめては往來をする暇も稽古をなさることにしては……母子の者は何にも知らん唯之れ觀柳が深切に云つてくれることゝ只管喜びに堪へず　みさ「難有う存じます今日立ち歸りました上で家主とも相談いたしての上御厄介に成りますると其日は觀柳の家から歸つてさて香取相模に話しをすると思いことでは有りませんから相摸も之に同意をいたして終に兩人は江上觀柳方へ引き移ることに相成りました。

彌々江上觀柳方へ引き移つて見ると初めの程こそ觀柳も念を入れて指南をいたしたが元々之が下心ではない迫々と日を經るに從つておみきの樣子を見ては仇厭らしいことを云ひまするおみきも初めの内は冗戯であらうと思つて居たが二度が三度となり三度が四度となり終には怪しきまでの振舞ひに及びまする江上

觀柳においては度々おみきを口説いたが更らに其甲斐なく中々物堅い樣子であるから到當諦めをつけたものか　觀「こりやあ迚も乃公の云ふことを聞く婦女じやあ無い之まで苦心をして世話をしたのは殘念だが今乃公の云ふことも聞かず急に暇をくれろと云つて出られると乾度乃公のことを人にも話すに相違ない然うすると結局は乃公の恥になるのだこりやあ一番斯う事が破れて來たのだから仕方がない不便だけれど崎山親子に彼等の身の上を話して打つて取らせるより道はない然うだ〳〵と考へを回らして江上觀柳此方はおみきにおきましては　みさ「何うも那れ程心切に御稽古下すつた觀柳先生が那んな方だとは知らなんだ今と成つて見れば此所へ引き移つて來たのが此方の誤り何うやら言葉の樣子では吾々母子が大望のこともおぼろげながら知つて居るに違ひない今更御指南に預つた恩はあるけれどもこれは

斯樣な所に一時も便々として落ち付いて居る場合でない急に暇を取ると云ふのも可笑い樣ではあるけれども大望を抱へた身なれば仕方がない何とか今日中に工夫をして早く相摸方へ立ち歸りたいものだ早くも考へ附きましたから内々お春を相摸方へ使ひに遣つて相摸が急病の由申越させおみさお春共に言葉を揃へて一先つ相摸方へ立ち戻りたき由觀柳に話しをすると先きを越された觀柳仕まつたとは思つてが今更何うも仕方がない兩人が云ふがまゝに聞き入れて一先づ歸してやることに成つたからおみきお春は共に喜び急ぎ相摸方へ立ち歸りました。

木から落ちた猿仝樣の江上觀柳惡人ではあるがさて何うすることも出來ないから兩人の者を穩便に歸したがさながら掌中の玉を取られた樣な心地で殘念で堪らない此腹癒をするには崎山父子へ彼等の身の上を話すより外はないと邪智深い觀柳密かに崎

山父子に面會をいたして思ひの通り内通をいたしましたから懲ろいたのは崎山親子然らば此方でも油斷をして居る時ではなく彼達作に非業の死を遂げさした時力を合せた侍の内川口嘉作岸上主膳の兩人を内々呼びよせ身の用心をいたしております元來崎山親子の内でも悴の平内は劍術も中々に達して力量も人並勝れておりますがさて惡事を仕て居ると云ふものは之が一段の弱身でございます。

此方は山崎母子におきましては再度相摸方へ立ち歸つて厄介の身と相成り果敢なく月日を送つて居る内に此相摸の許へ折々遊びに來る老人がある一二度話しを仕合つたのが始まりでおみき母子とも懇意に相成り段々話しをする内に此老人はまてとに風雅の道に熱心のもので來る度〳〵にお春に和歌の話しをしたり俳諧の話しをしたり致しまする元より發明のお春でありますか

ら何を聞いても覺へて居て忘れない學んでおいて損は無いから心安達を幸はひにお春は此老人に就て和歌俳諧の道を學びせめては之等のことを樂しみに敵打本懷を遂ぐる日を待つております次第に和歌俳諧の道も委しくなるに付けまして老人の喜びも又格別お春母子に大望のあることは知らないから今度はお春に勸めて繪でも習つたら何うだらうと云ふ初めの内は然う風雅の道ばかり學んで居られませんからお春も和歌と俳諧だけにしておりましたが度々老人から勸められますゆへ或時此ことを母のおみさに話しをいたすと　みさ「折角ろれ程に仰しやつて下さるのだから繪も稽古して見たが宜からう殊に敵崎山父子の行方は今何う云ふ所に忍んで居るか一向何の手掛りも無い如何なる事でも習つておけば斯う云ふ大望のある身には何んな所で役に立つかも知れないこれは老人の思召し通り稽古いたしておくが何

い母から許るしを受けましたから今度その老人が來た時に　春「度々のお勸めに預かりまして此度母上に話しをいたしますると何分にもお頼申して此上御迷惑でも繪の稽古をお願ひ申せと申されました切望御老人御面倒ではございませうか左樣をれば御指南下さいましと云ふと老人　老「御稽古なさいますか所で此繪の方は私しがお教へ申すのでは無い唯まわこれまで和歌俳諧をおやんなすつたことゆへ繪をお學びに成つたら宜からうと思つてのことけれども其師匠は私しが懇意のもので狩野家の畫師がありますから之へお世話申しませう　春「左樣でございますか何分宜しくお願ひ申しますと此所で此老人が懇意にする所の畫師狩野派の常丹と云ふ人へ話しをして今ではお春毎日この常丹の許京橋采女町まで通つて居ります。

或日のことと日がくれましたから常丹の家を立ち出で南傳馬町の

我家へ立ち歸ろうとやつて來ると恰度夕方から吹き募つたる所の大風大地の砂を捲いてぴゅーと物凄い有樣空は一面に掩き曇つて夜はまだ早いが一軒とて戸を明けて居る家はない物淋くも山崎お春師匠常丹の家を立ち出でまして今の銀座通りの所へ出で風に向つて立ち歸る捲き來る風に砂が交じつて來るから迚も眼を明いては歩行かれません時々行先きを透して見ては兩の褄を押さへ片手に紬道具を包みました風呂敷包み持つて京橋の橋上まで漸ぐまいりますとばつたり突き當つた一人の侍がある

春「れや御免下さいまし飛んだ失禮をいたしました侍の方は追ひ風に成つて居るから同じものでも眼位いは明いて居られる今突き當つたのが十三四歳の少女であるから侍「氣を注けろ高が少女の分際で一廉の侍へ体を當てしは不都合な奴其まゝには許さぬぞ意外の立腹だから

春「御免の通り

砂を捲いてまいります大風に向つてまいりました私迚眼も明けませんで突き當りましたは重々の不調法切望御免し下さいましと云ひながら風の絶間に眼を開いて件の侍を見てあれば見覺へのある崎山平内

春「やあ其方は崎山平内か

平「ゑつ……と吾名を呼ばれたから驚ろいた崎山平内一足下つて前の少女を見ると此方も見覺へのある山崎彦作の一人娘夜はまだ宵の内だが四方を見廻すと人つ子一人の影もない

平「うむ如何にも拙者は汝の尋ぬる崎山平内汝は吾手に掛つて相果てし山崎彦作の一人娘名は知らないが父の最後を無念に思ひ女達らに贈太くも吾々を尾け狙らふとは衆て聞いた望み通りに今此所で拙者に遇つたは汝の不運不便ながら生けおいては前途の邪魔物一命取るから覺悟をしろと突然腕達者の平内が一刀すらりと引き拔いてお春を眼掛けて切つて掛る女でてろあれ子供

でこそあれ兼て劍術の鍛練ある山崎お春斯くと覺悟の情劍を取つてちやりゝと受け身が輕いから飛び退つて敵平内の隙を伺ふ平内も駈のまに〳〵お春の姿を狙ひながら今にも切り込まんづと其場の有樣此時平内が向ふをふつと見ると黑い人影が此方をさして飛んで來る脇に疵のある平内故こりやあまご〳〵して詰まらない奴にでも逢つちやあ一大事此所で此女を打ち取らないの は殘念だが一先づ此所を逃げ樣と身を翻がへして何所ともなく雲を霞と逃げて往く

春「身怯あり崎山平内立ち止まつて勝負をせよ踵を返して立ち合へ……と聲を限りに叫んで居る後ろへ駈け付つた一人は之何者でありませうか次席に

第六席

砂吹き拂ふ大風に何者とも知らず京橋の橋上においてぎらりさ

らりと太刀を合して居る所を一町あまり此方で認め其まゝ其所を駈け出した一人の黑影之何者であるかと云ふと前席一寸名前だけ申述べましたる所の夜中見廻り役石田五郎助と云ふお方でありますが今此ところへ駈け來つて見ると一人の姿は何所へか消へて唯年端も往かぬ一人の少女が懷劍を逆手に持つて其姿を見送つて跡を追はんとする樣子唯事ならずと石田五郎助が聲を掛けて

五「これ〳〵待て……待つて居れ……之を聞いたからお春が後を振り返つて見ると其所に一人立つて居る婦人が腕を押し鎖めて能く其面体を打ち眺め

春やあ貴方……見覺へがあるから暫を掛けたが名前は忘れて居る五郎助はつら〳〵と見て

五「やあ貴女は何時ぞや非業にお果てあされたる山崎彦作殿の息女ではござらぬか拙者は其折から市中見廻り役を勤めて居る石田五郎助と申するもの那の折拙者が通りかゝつて貴女方母子の心

を御め何の緣か又此所で此有樣に出逢ひしはまことに何かの因緣であらうさあ斯く御緣のあるからは拙者も及ばずながらお力添へをいたす多分は貴方方望みの程も存じて居るが苦しからず拙者と全道をいたして一度拙者方へ立ち歸り委細のことをお話し下さい身の大望と有れば話し難きは無理ならねど必らず必らす思しき樣にいたさぬに因つて安心の上お出でなさいと人目を憚る五郎助が念を入れたる心切の言葉お春は心中に何時ぞや父彦作が災難の折といひ今宵巡り合せての心盡しとりやあ偽りのある人ではあい折角切に云つて呉れることゆへに言葉を背くも失禮と思ひまして　春「難有う存じます左樣なればお言葉にあまへましてお宅へ伺ひました其上に委しいお話しはいたします切望御迷惑でもお召し連れを願ひますと其まゝ石田五郎助に連れられて南新堀の五郎助の住居近所放れた一軒家　五「これ此

所を明けろ」中から女房が大層早い歸りだとは思つたが良人の聲に相違ないから雨戸を明けまするとお春に眼を付けて　女「おや此女の子は　五「靜かにしろ跡で話して聞かせるから」一寸止めておいて雨戸を締めさせた五郎助其頭市中の安全を計るために斯う云ふ少し腕の利いた人を使つて夜々廻らせておいたが之は至つて小樣の者であるから從つて有福の生活ではない女房一人と五郎助との二人暮らし夫婦共に揃ひも揃ろつて心ざし實直に貧乏はして居るがさて至つて心切深い方五郎助から女房に大器を話してそれからお春に向ひ　五「お春さん之は拙者の女房で拙者同樣の氣姓ゆへ只今何をお話しに成つても差支はない遠慮することは無いから一伍一什を聞かせて下さい　巷「左樣なればお話しをいたします貴方樣が御存知の通り何時ぞや父彦作が非業の最後を遂げましてから岡母さんも

私しも無念の思ひ遺る方なく切望敵を打ちたいとろれか目ざしはいたしましたが先きは早くも悟りましたものか屋敷を壁んで行く方知れず妾兩人はそれから劔道を學びまして昨日今日と送ります内妾は此間から采女町の常丹と云ふ師匠の許へ稽の稽古に往きます内今日も今日とて其歸り途京橋まで來りますると折柄突き當りました一人の侍詰をいたしながらに顔を見ると待つ甲斐あつた崎山平内先きから切つてかゝるを幸ひに妾も懐劔を抜き合せて受けつ流しついたして居ると敵は貴方樣の妾を見たものか何所へ往きましたか雲霞ヨリ妾しも貴方樣に巡り合ひました其折平内の言葉で聞きましたか正しく敵は彼等親子に相違ございません此上は何んなに苦勞をいたしましても江戸と行方の知れた彼等親子探し出して本懐を遂げまする心得果敢なき妾は子の者を切望不憫と思召してお力添へを願ひますと年は往か

ないが理の分つたお春の物語り聞く五郎助は嘆息いたして五「あ一年端も往かぬに天晴れなお志抽者も兼て那の折に御本懐をば影ながら望んで居りしが今此所で貴女にお話しを承はる上は及ばずながら一臂と成り貴女方母子が本懐の日の待ちまする春難有う存じます此上お願ひ申したきこともございますが今宵はさだめし岡母樣も御心配なすつておりませうから之にてお暇をいたしまする切望お願もございましたら一度妾方へお越し下さいますやう只今は南傳馬町二丁目香取相模と云ふ周易の占ひ渡世をいたしまするものゝ家に厄介に相成りおりまする　五「左樣でございるか今宵は母御も定めし御心配なすつていあらうから抽者念のため之から全道をいたしてまいらう　春「難有うは存じますがいざそれでは却つて恐れ入ります　五「いや然うでござらぬ決して何事も御遠慮には及ばんさあ御一緒にまいりませう」と

何所までも心切なる所の石田五郎助お春の手を取つて南新堀から南傳馬町なる相摸方へ送り届け此所でおみさにも面會して懇々と話しをいたし委細のことを申しまして之から江戸市中見廻り役石田五郎助が母子の者へ身を入れて厳探索に力を盡して居る

おみさは此日の有様をお春から聞き取りまして無念の涙遣る瀬なく縱令今は見逃がす共有らん限りは探り出してやはか助けておくべきか時を待ざれば是非もないが時至らば一太刀たりとも恨みを報ひんと母子は全じ涙に掻きくれまして世間を忍ぶ寐物語り　春「阿母さん何うも私しは京橋で那の平内を逃しましたのが残念でなりません　みさ「いろ〳〵れは是非もないこと折もあらば又明日にも巡り合ふべき崎山父子此上は只お前も妾しも唯劍道を研いておいて心に油斷を仕ない様に仕て居あければなりません　春「就きましては阿母さん其折平内の太刀を見ましたが何うも長い刀でございました今に時至つて彼を相手に敵ひまする時中々妾達の小太刀では思ふやうにまいりませんが何うか之は今の内宜い先生を選びまして強太刀の稽古をいたしたうございます　みさ「成程それは道理のはかし宜いところへ氣がついてくれましたられでは翌日にも相摸殿に話しをして其先生を聞き合はして貰ひませう併し江上觀柳と云ふやうな怪しからぬ者でも困りますから今度精々氣を注けて能い先生を選びませう　春「その事に就きまして妾は那の五郎助様にお頼み申して見やうと思ひますが貴方は何うお考へ遊じますか　みさ「何から何まで御心切深い石田様那のお方に話しをしたら吃度宜い先生もありませう翌日は私しが南新堀へ尋ねて往つて宜くお頼申して來ませう　春「何分宜しくお願ひ申しますと聲は低いが互に分るやうに話し

せん

をいたし兩人其夜は夢路を辿りました

おみきは翌日の夕方より傳馬町を立ち出でゝ彼南新堀なる石田五郎助の宅へ至り五郎助に面會をいたして委細のことを話し劍道熟達の先生に就いて此上劍術の稽古いたし度旨話しまする

と暫時考へましたる石田五郎助　五「それは仕しても結構なお心掛け如何にも拙者が心配いたしませう此仝じ南新堀に富永一翁と云ふ神揚流の名人がござる拙者此方へ話をいたして幾重にも劍道鍛錬の程取り計らひませう」其頃南新堀に住居いたす富永一翁と申す方は元御旗本の御隠居代々神揚流劍道の家筋にて分けて此一翁先生と申する方は武道においては若年から廣く名譽を得たまひ今は行年八十歳に相成るが其業は少しも衰へず當時何んな修行者なゞが來ても一人として及に立つものはない位い其頃富永流とまで名を取りましたのは此方石田五郎助から

いと懇ろに話しをしてくれましたから老年ながら一翁先生兩人の心に感服いたし早速御承知に相成りましたおみきお春は大ひに喜び之から相談をいたし善は急げとあつて次ぎの日から毎日南新堀の先生方へ通つて母子稽古を勵んで居る内にも一年ばかりにも相成つたが敵の行方は更に知れない或日お春におきましては考へて　春「妾は今劍術未熟であるとは云ひながら決してうか〳〵と月日を送つて居る時でない明日にも敵に出て合ひなばいさぎよく勝負を決さなければならないのときは何卒阿父さんが平常指して在しつた一刀で敵の身体へ切り込みたい然うすれば阿父さんも嘸や草葉の陰でお悦び修羅の妄執もお晴らしになるであらう切望那の刀を貸つて充分の働きが出來るやうに成りたいものだ」とお春は斯う考へましたから其時直ぐに父彦作が平常指の一刀を取り出して持つて見ると何しろ力量人

に勝れなしたるところの達作が指料中身が三尺一寸で鐵の鍔中や以つて重さばかりで大したもの　春「これは又何と云ふ重い刀であらう今まで劍道も習つたが此刀を持つて自由に立ち働くと云ふことは迚も出來ないと云つてそれがため折角思ひ立つたことを止めて仕舞つては本意でないこれは何とか工夫をして此刀を充分使ふ樣になりたいもの」と考へましたお春直ぐに此ことを母のおみきに話しをして恰度其刀の大きさ程の木太刀を作り之にそれと同樣なる重量を付けまして夜な〳〵四つ過ぎから近所の寢靜まつた頃時刻を計つて是を持ち出し裏庭へろつと出ては此木刀を振つて居る何しろ今年十四歳に相成つたる女の腕初しめのうちは息が直ぐに切れて迚も充分には振り廻せない頓て三ケ月斗りの間撓まず怠らず遣つておりまするとそれが一心だから恐ろしい今は早や腕も堅まつて來て一時間半位い振り舞はして

居ても左のみの草臥はしないする内に一翁先生の仰でお春は富永長次郎と云ふ先生の高弟と立ち會をいたし先生の眼前で勝負を爭ひましたが此時十番の仕合で八番までお春が勝ちました先生大ひに御喜びあつて此所でお春に極秘の太刀筋を免るし尙母のおみきも怠りなく劍術の稽古をいたしておりますする内に光陰に關守なくも一一翁先生に就いてから三年の年月を相經つた之では敵が何れ程の者か知らないがまづ大低の者なら心安からうと云ふ一翁先生の仰せであるから母子大ひに悅びまして厚く先生に禮を述べ又石田五郎助からも敵打本懷の折は改めてお禮に及ぶべき由傳言に及び一とまづ先生の門下を引き退り偖へに敵崎山親子が行方を探つて居る内に香取相模におきましては苟且ならぬ病氣に罹り至つて重体の有樣であるからおみきお春は一方ならず心配をいたして看病

して居りまするとと相摸の門人で平井仙龍と云ふ者も此のことを聞いて驚ろき來り共に山崎母子と心を併せて介抱怠りなくいたしまして居りつたが相摸におきましては之までの壽命と見えまして今日か明日かと云ふ有樣時に此仙龍を枕近く呼んで委細を話し聞ねんてろに頼んで到當泉下の人と成りましたが此方は平井仙龍相摸に劣らぬ人物で此話しを聞いて初じめて山崎親子の身の上を聞くと仙龍ろれに就いて思ひ當るとが澤山ある或時お みきに向ひまして 仙「いまだに敵の行方相知れぬ御樣子だがる体敵の崎山親子と云ふは何う云ふ人体の者でございます みき「されば崎山兵右衛門と云ふは今年五十七八歳色淺黑く眉毛太つて身の丈けは五尺三四寸面長の方悴の平内と申しまするは今年二十七八歳全じく眉毛太き男色は少々白い方で之も身の丈五尺三寸位い 仙「はあ成程……然う聞きまするとと拙者において少々心當りがございます みき「御心當りと申しまして何か手掛りのやうなことでも……

仙「左樣でございます恰度一月ばかり以前私しの宅へまいりました親子体の兩人只今お話しの人相に露たがはぬ相格 みき「はあ成程して其者共が如何いたしましたか 仙「まあお聞き下さい兩人揃ろつて私方へまいり身の上の判斷をいたしくれよと申しまする故左樣な惡人とは必得ず云ふがまゝに判斷をいたしましたが其折彼等の尋ねまするに旅立ちをいたしたいと思ふが何れの方角が宜しいかとの問ひ西北へ足を向けなば幸多しと示しました其節に然らば甲州路をさして出立いたすも差支へなきかとのこと私宅の近邊より甲州路は西北に當つて能い方角と申しまするとと親子ろれと思案をしたものか一體逃べて立ち去りましたが那の兩人の摸樣では當時正しく甲州路に身を忍ばせて居るに相違ございません みき「成程ろれは宜い手

掛りして其折兩人の服裝は如何でございました　仙「それは心も置きませんから宜くは覺へておりませんまだ零落れぬ浪人姿又とも思はるべき一人は丸に違ひ鷹の羽の紋所がついて居りましたかさては彌々崎山父子に相違ございませんそれに引かへ折から此江戸市中に身を忍ばせて居るものと石田五郎助様をはじめ皆様に種々御心配を掛けましたが一月以前に然う云ふ姿で江戸を立ち出で甲州路へ逃げ伸びたとは知らなんだあー宜い手掛を聞きました仙龍様縱令甲州が奥州でも妻がためには良人の仇娘お春のために父の敵今から草を分けても探し出し多年の恨を報ひたうございます仙「御道理でございます併しおみき様彼等が出立いたしましたは一と月あまり以前のこと其甲州へ落ち付きましたるものか乃至は甲州路を經て何所か他國へ落ち付きましたものか跡を尾けて

お探しになると云つても雲を果てなる敵の行方之から何うなる思召しでございます　みき「さあ設令何所に居るにもせよ斯うと手掛りを承はりました上は手を空しくして立ち返るとも一旦甲州路へ跡を付けてその行方を探ります切望仙龍様貴方この相模殿の跡をお立て下すつて首尾能く敵に出合ひまするか乃至は手を空しくして返つてまいりまするかまでお待ち下さい　仙「然う御決心遊ばす以上は決して止はめ致しませんから甲州路と申しまする山又山の難場難所女の足で試さだめて御苦勞でございませう　みき「なあにもー之が多年本望の樣でございますそれやこれやは厭ひませんが何を申しましても女の腕何時如何なることからいたしまして或は返り討ちに成らぬとも限りませんこの妾し親子が此のさき三月程經ちまして何の便りもいたしませんはもー返り討ちに成つたと思

召してせめては亡き跡のとひ吊ひをお願み申します又一とつに相撲殿の御回向妾から申すまでもございませんが何分共に宜しうお願ひ申します」とおみきは涙ながらに仙龍に委細を話し膝近くお春を召しよせて此てとを話しましたる時　春「左様でございますかそれは宜い手掛りでございます切望一日も早く敵を打つて草葉の蔭の阿父さんをお喜ばせ申さうとは思つて居りましたが一向行方の知れぬ崎山父子不圖したことで仙龍様から彼等が甲州路へ立ち退きましたと承はる上は海山如何なる場所なりとも妾の厭ふ所でございませんが左様なれば阿母さんお手纏ひかはしてくまして年月の無念は同じ妾とお前例令如何なる辛苦をいたすとも良人の仇父の敵を打ちさへすれば二度と此身に要らぬ命万一や本望達せずして知らぬ旅路の土となり果つるとも之までの運命決して嘆くことろでない跡は仙龍様にお願み申してあるから然らば翌日にも出立いたさう」と親子は斯くと決心いたし翌日南新堀なる石田五郎助を音づれて斯々云々であるから甲州路をさして出立いたし敵の行方を相探ね本望達して返らざれば知らぬ他國へ骨を埋めるかも知れないが切望其折りは御不憫と思召して下されと涙ながらに暇乞をいたし翌々日南傳馬町を立ち出でゝ身にまだ馴れぬ旅支度お春は身風裝もいと優しく甲州路をさしてまいります

新宿を立ち出でまして八王子までは別にお話し申すこともございません翌日八王子の宿を出立いたしまして此所から一里ばかり往つた所に小佛峠といふ所がある上下三里の峠で最と物淋しい所當時は中央鐵道の工事で此所の裏は隧道がずーと抜けて居るおみきお春の兩人にかきましては女の足ながら此峠を登り頓

て其頂上にも至りましたから　春「阿母さん此所がもー頂上でございますか　みさ「もー頂上の様子だがお前はまあ定めて足も疲れたであらう　春「いゑ私しは草臥どころではございませんこの田舍の道中と申しまするものは山川の眺めがございまして却つて氣散じに相成ります阿母さん此所に奇麗の水が流れておりまするお口でもお濯ぎ遊ばして少しお休みなさいまし　みさ「おーてれはまあ奇麗な水流れて居る水といふものは清いものでどれ口でも濯ぎませう」とおみさは泉の流れへ立ちよつて顔を洗ひ口を濯いで居りまする折柄初夏のことでありまして時鳥が啼いて過ぎた様子　春「あれ阿母さん那の泣く鳥は何でございませうみさ「お前も那れを聞きましたか那れは山郭公の泣き聲箱根あたりでも時々泣いたがお前はまだ知らなかつたのか　春「はい和歌俳諧ではよく存じておりまするが現在聲を聞きましたのは今日

が初めて血を吐く聲とか申しまするがそれと思つて聞きます故か何となく物あはれに聞きました　みさ「まことに田舍は風雅の多いもので時鳥なぞは居ながら聞くとか申しますけれども泣き過ぎたのは那れは左りから右へ渡つた故何か身に吉左右があませう　春「阿母さんそれはまた何故でございます　みさ「何う云ふ理由か知らないがよくまあ世間で云ふ聲へ唯まあ一日も早く敵打本懷を遂したいもの」と母子は田舍の景色を物珍らしく眺めながら休めました足を踏み出して今度は峠の下り道兩人は馴れぬながらも道を捗取りまして恰度小原と云ふ所で晝飯を濟ましかから少し道入ると二瀬越と云ふ渡しがある之は甲州桂川の流末で渡しが二つに別れて上の渡し下の渡しと云ひますおみさは春の兩人におきまして道を聞きながらに此二瀬越へ下り今下の渡しを越へて三町ばかり河原を通り上の渡しへ掛つて船へ乘

ろうとすると今向ふから渡つて來たる船の内から出た旅支度の二人一人は侍姿で一人はうのお供らしひ者おみさが何心なく二人の姿を見ると一人は知らないが供の姿の一人は去ぬる頃ひ召し使つて居りまする所の久八に相違ないと顔を見詰めて居りましたが此方も久八驚ろいた兩人は顔を見合せて互に言葉もない　久「やあ御新造樣……」と云はうとしたが考へました　久「八久待て〳〵此所で乃公が名乘る所じやあ無いお可哀相に母子お二人で斯うして道中をあすつて居るのは定めし過つる頃旦那樣が非業にお果てなされた恨みを晴らしたいと敵を探しに御旅立なすつたことに相違ない今乃公が斯うー供をして居る主人と云ふは元乃公が主人の那の蒼作樣を殺害に及んだ下手人の一人旨くそれを探し出したから江戸へ乘り込むのを幸ひ供に連られて此所まで來たと云ふも切望此お二人に遇り合ひたいと思ひしため

唯今一と言話しを仕たいがそれじやあ敵の此奴に悟られて仕舞ふ宜し〳〵一と工夫してお二人に話しを仕やう」と考へましたときき此方はおみきが心中に　みき「あー正しく久八に相違ないが見れば供に居いてる那の樣子旦那と云ふのは何者だか知れないからせめて一と言話しはしたいが那の久八も昔しの恩義を忘れぬ心なら今に何とか工夫を仕て戻つて來るであらう」雨方斯う云ふ心得で互ひに眼と眼を見合せて立ち別れたが此久八一寸氣轉が利く男であるから小さな手荷物をはさと船の隅へ殘して侍の跡に尾いて下の渡しへ掛り此所を越して仕舞つたとき船から下りてきろよ〳〵といたして居る久八　久「旦那樣少やお待ち下さい侍「うむ何だ何うしたと云ふのか　久「何うも飛んだことゝは何をしたのだまして申し理由でさいません　侍「飛んだことをいたし久「へい小いさな手荷物を忘れてまいりました　侍「なに手荷物を

忘れたとかゐりやあ何うも不可んな　久「へい　侍「早く立ち戻つて探して來い　久「併し旦那樣置き忘れてまいりました船は那方の船でございますお待ち遠うもございませうが向ふに高いところ見へます、あの茶屋でお休憩旁々私しが取つて參りますまで切望お待ちなすつて下さいまし　侍「おー承知いたした那れには少し大事の物も這入つて居るから成るべく急いで往つて取つて來い　久「へい〳〵」久八は占めたと思つたから直ぐに踵を返して下の渡しを越へ河原を急いでやつて來る

此方はおみき心ありげの久八の振舞を見てあると今久八がわざと手荷物を紬中へ殘して立ち去つたから　みき「あー厭しけない久八さては妾が心中を汲み取つて戻つて與れる心得であるか別れてからの長い年月ひよつとしたら敵の手掛りあらうも知れぬ心待ちにして待つて居ると早は此方へ戻つて來つた久八畢竟如

何なることと話し出すか次席のおたのしみ

第七席

前席申し述べましたる通り二瀬越の渡しにおいて圖らず巡り合ひましたる所の元の主從おみき久八は一別以來の涙に咽んで暫時言葉も無かつたが漸う涙を拂つた久八、　久「御新造樣今更何からお話し申し上げませうか云ふに言葉もありません唯昔しに變らぬは久八の心底切望お疑ひなく委細お話しを願ひます　みき「今更何を疑ひませう久八お前はまあ其後何うして斯う云ふ所へしを越へた如あ那りやあ旦那樣を殺害した下手人の一人でございますいます　みき「あつ……　久「そのお驚ろきは御道理でございますか之には段々と理由のあることと兎に角委細は跡でお話し申上る

といたしまして今私しが長くこゝで暇を取ると何とか悟られて仕舞ひます那れは奈良原將監と云つて旦那様が御最期の折鎖にて旦那様の太股へ突つ込みしものに相違ございませんぬきさしては御新造様貴方が此所までお越しになりまする途中に一つの峠かございませう之から私は那の將監と同道して何とか工夫をいたした上恰度日が暮れてから那の峠へ掛つて往きますから御大儀ではございませうか那れも敵の片つ端し故切望あとを密とお尾け遊ばして彼の油斷を見すました上首尾よくお恨みを晴らして下さい　みき「それでは那れか良人彦作様へ下手人の一人奈良原將監と申すものかよくまあ早速知らせてくれた然らば委細のことは彼を打ち取つての跡で話しをいたさう　久「へいだか併し御新造様彼奴も人殺しでもするだけあつて中々腕か利いております私しか何んでも後を向かぬやうに誤魔化しきから遣つて

往きますから貴方はお嬢様を何所へかお預け遊し日の暮れるのを相圖にして那の峠へお掛りなすつて下さい　みき「幾ら腕か强いと云つて妾母にも一心でありますす殊に久八お前は知るまいか娘のお春は年頃鍛練の甲斐あつて今では劍術も相應の腕前何は兎もあれ妾兩人は日か暮れるのを相圖にして那の峠へまいります　久「然らばお嬢様も御同道でございますかいや何うも嘸や御無念と思召したところからお腕前も勝れたでございませう夫では必らず共に御油斷を遊ばしますな　みき「何分其方にも頼むぞよ親しき主從か此場に約束をいたしましておみきお春は渡し手前の茶屋にあつて休息をする

此方は久八何喰はぬ顔で手荷物を持ち歸り待ち乘て居る奈良原將監のところへ來ると　將「これ〳〵何ういたしたと云ふのだ久「まことに重ね〳〵申し理由もございません私しか此なる荷物

を忘れたと云つて戻つてまいりまするとあの地の悪い船頭共が何所へ隠して仕舞つたか何時までまつても出してくれません仕方かないから力づく取つてまいらうといたしまするとその理に私しを怖く思ひましたものか只今出して寄越しました　將「然うかれは御苦勞であつた乃公は斯うして大分休んだからもー足の勞れも直つたさあ一緒に出掛けて呉れ　久「旦那様それは餘まり情けない　うございます今も今とて私しは此荷物を取らうかためには隠分と骨を折つてまいりました切望茶を一ぱい呑むまでお待ちなすつて下さいまし　將「然うかれなら茶を呑むか宜い」久八は尻を据へて仕まつて茶を呑んで居る　將「てれ〳〵御亭主やてれかち峠向うで旅籠やのあるところまでは何の位いある　亭「へい左様でございます峠を越しますと直ぐ山下と申しまして其所に旅籠屋がございます　將「其所までは何里あるかな　亭「彼之五里

もございませうか　將「うむ　ろりやあまだ大變だ何うだ藤助もー茶も宜い加減だらうから出掛やう」久八は藤助と偽名で居る藤へいそれしやあ出掛ることにいたしませう」頓で兩人は此所を立ち出でゝ道を急ぎ千木良と云ふ所の宿へ掛りまするとあの藤助乘て一件の下心があるから將監と一緒に成つて歩るい居たものか二町跡から後れてばつー〳〵とやつて來る仕方かないから將監待ち合せて居ては　將「藤助お前は急に歩行けないやうにあつた様子だか一体何うしたと云ふのだ　久「へい別に何うてゐることはありませんか何だか石に兩つ三つ蹴爪突いてから以來といふものはすつかり足へ勞れかまいつて迚も早くは歩けませんそれに旦那様全体蚤の御飯は何所で頂戴をいたしましたか　將「宜く喰物のことばかり考へて居る奴だ蚤飯は上野原宿とか云ふ所で其方は確か十二三膳喰べた筈だ　藤「成程然う仰しやられると何

うやらそんな心持ちもいたします旦那様ちーつと夕飯には早いと存じますが此道中と申しまするものは何うも腹が出來上つて居ないと離澁のものでございます　將「又喰ふことを考へたか仕様の無い奴だ　藤「然う仰しやれると恐れ入ります次第でございますかもし斯う労れてまいりにしては主從同樣といたして貴ふより外はありません　將「生意氣のことを申さんでも左程まで腹が空いたものなら喰べるか宜い　藤「難有うございます幸はひ此所にあるお茶屋之へ寄つて頂戴いたします切角貴方はお茶たけでも……　將「いや拙者も實は空腹でおつたのたろれへ立ち寄つて食事をいたす」兩人は之へ立ち寄りまして　藤「姉さん何が佳味いもので御飯を下さい　女「へい　藤「序てに一寸お銚子を一本」兩いて居た將監か　將「これ藤助貴樣は何所まて贅澤を云ふのた此道中へ掛つて酒に醉つては何うすることも相成らん　藤「旦那樣

の前てでございますか猛々の藤助とまて云はれた殿公大丈夫て御座いますから切望御安心あすつて下さい呑める口だから一寸一本の酒を呑んて之ても充分暇を潰ふしまた峠へ掛つても日か暮れないと思つたから悠然氣まかせに御飯を喰べて居る此方は將監疾に食事も終つて仕舞つて口を濯いたり草鞋の紐を結び直したり仕て來て見るとまた藤助は御飯を喰べ切らない樣子　將「藤助貴樣は何ばい喰べる心得た　藤「左樣てございますこれて恰度十四はい目てございますからまあ半道中てございますかな　將「てれ〳〵冗談を云つて喰べるのは宜いか腹も身の内た今に苦しいなぞと申すなよ　藤「大丈夫でございます御安心をなすつて下さい」何時まで喰べてはおられませんから漸く茶腕と箸をおいて口を濯ぎさて日の模樣を見たが峠は直もー其所であるにまだれには少し間がある何とかして暇を潰し今宵は首尾能山崎様子

に敵の一人奈良原將監と云ふ此奴を打たせてやりたいものだが日が暮れなくつちやあ都合が惡るい頻りに將監は急いで出掛けやうとするが一年以來も召し連れて居て氣心も知れて居る乃公だからいろ〳〵のことを云つても默つて居る此所等で一とつ怪病を遣つて暇を取り何うしても峠へ掛る頃は日暮に仕やうと斯う考へた久八　久「且那樣最前から出掛けやうと思つて立ちまするとなにう云ふ者だかお腹が痛んで堪りません何うも痛いあ痛い……痛い……」頻りに痛む樣子であるから將監も之には困つた　將「ろれだから云はぬことでは無い貴樣を見たやうに道中で大食をして堪るものが渡しを越へて此所まで來る間と云ふものは拙者が供だか貴樣が供だか分らぬ位い何うだ痛いので少しは凝りたか腹の皮の裂けなかつたのはまだしも貴樣の仕合此から供をするならちと心得ろ　藤「へい何うも恐れ入りました

あ痛……　將「困つた奴ださあ此藥りを呑めよ」印籠を取り外して中から藥りを出し藤助の口へ入れてくれたから藤助之には弱つた噛めもせず呑み込めもせず口の中でむづ〳〵やつて居て隙を覗つて吐きださうとするが斯うなると意地の惡いもので將監何時になく親切について居て呉れるから藤助は那方へ往つてくれろと云ひたい位い其内に丸藥だから口の中で解けて來たや何うも苦いの苦くないの云つて藤助迚も堪らない怪病なぞは出來ないものだと後悔をしたがさづ斯うして暇を取つて居れば山崎母子の爲めには幸はひ自分もせめては大恩ある主人彦作殿の無念を晴らす片端しとそれを思へば藥りの苦いどころでは無い女中の持つて來た湯を口へ入れて差支へのない藥りだと思つたから吾慢をして呑んで仕舞ひ自分で腹の邊りを撫せながら表ての日陰の樣子を見るともー待つて居た刻限に成つた樣子　藤「旦那樣

お蔭様で漸く痛みも治りました何うもはや飛んだ御厄介を掛けまして何共申理由がございません　將うむ痛みが治つたか大食も過ぎには宜いが飽まり馬鹿喰は止めに仕ろ　藤へえ大喰の野郎とはもー緑を切つて此所等へ置き去りにしてまいりませう　將それ〳〵藤助駄酒落を云つてる場合じやあ無いだ彼だと云つて貴様のために暇を取つたからもー直ぐに日暮れた峠へ掛つて聞くなるだらうが兎に角山下とか云ふ旅籠屋まで往つて泊らうさ支度をして出掛けるが宜い　藤宜しうございますお腹さへ出來て居れば夜道が何道であらうとも何ともうんあことには掛ひません　將のお荷物は私しが持つてまいります　藤茶屋の勘定を済ましてすつかり身支度をいたし奈良原將監に供の藤助はもー山の端へ入らんとして夏の夕暮の風涼しく兩人は弱々小佛の峠へと掛ます世間は甲州街道でございますから相應に旅人飛脚のやうな

ものが通りますが何しろ餘まり氣味の能い峠ではございません　將から日が暮れてからは人通りと云ふものが絶へて少もない休すんだ足でありますから初まりの内は大分早くもー峠の半までも來りました　藤旦那様何うしても坂道へ掛りますと思ふ樣に往けません之からさだ頂上までは少し間があると思ひましたが此所等で一吹やつて私しは肩を替へたう御座います　將乃公も坂う云ふ坂道へ掛けては至つて足が運ばない何うせ日が暮れたのだから一吹呑んで緩くり往こう　藤私しが腹を痛みましたり色々のことを仕たばかりに此んなに遅くならなくつて宜いものを何うも相濟まぬことをいたしました肩から荷を下ろして將監諸共其所で一吹呑み頓て藤助は肩を替へて此所を立ち上り　藤さあ旦那様お出掛け遊ばせ　將おから峠の道を辿つてまいりまする主從の兩人谷間を流るゝ水の音が幽かに下で聞えて松吹く

風がさつ〳〵と擽くばかり段々登つて往く内に小佛峠の七曲り之はうね〳〵と道が幾つにも曲つてつゝいて居るゆへ俗に七曲りと申します其初めの一曲りを先に立つた將監が曲つて往つたから跡になつて久八は考へたてるやあ此所までは何うやら斯うやら道が眞直だから跡を振り返つて見しも分つたが此所を曲つて仕舞ふと跡を振り返つて見ても分るまい御新造樣やお嬢樣は如何いたしたものかもー來さうなものであると道の曲り角に突つ立つた八久滿天の星明りに遙か來た道を見下しておると段々近付く二人の黑影さては時刻を違へずお兩人共御大儀あがら久八の言葉を入れてお出向きに相成つたか厚じけないいでや將監何れ程の腕前があるとも三人の苦心天の知らし召さぬこともあるいと其まゝ坂道を曲つて將監に追ひ付き驚て三曲りか四曲りも曲つて來たかと思ふ頃天運定まつた奈良原將監頻りに足が勞れ

て來たから　將藤助まあ一吹呑んで往こう待ち兼た久八　藤へーー何うも中々骨が折れますそれじやあ一息入れてまいりませうと又々此所で兩人は休すんで居る内に將監は身繕ひをいたさんと兩刀を腰から拔いて　將藤助この兩刀を持つて居れ　藤へい何う遊ばすので　將いや何うもいたさんが拙者一寸身繕いたしてゐれから又一とつ出掛けやうと帶を解いて衣紋を直し確乎衣服の繕ひをいたして居る此時早くも後ろの方からばた〳〵と駈ける足音が聞える兩刀を渡された久八が足音が聞えるからやあお出でに成つたなてりやあ此兩刀を渡しやあ何んあことを將監がするかも知れない此奴あ事そ捨てゝ仕舞はんと道の角へ立つて谷底へ兩刀を投げ捨てる何だか人の足音がすると思つたから將監が　將藤助人の足音がするうむ大分近寄つて來た早く兩刀を之へ出せ藤助の久八は此時五間ばかり下へ降つて居たが

久「且那様申理由もございませんが兩刀は谷へ投げ込んで仕舞ひましたと……逆髪立つた奈良原將監闇だから久八の身体を見透かし憎くき奴と追はんとする此時立ち現はれた二人の女姿　女「お待ちなさい」將監は全然夢の様だしつと之を透かし眺めて腰の一刀へ手を掛けやうとしたが二本共に腰はお留守だ將監の心細さと云ふものは何の位いだか知れない内に其所へ近寄つた山崎おみき　みさ「如何に奈良原將監とか汝妾を知るまいが妾は過つる寛政五年汝等惡漢の手に掛つて相果てし山崎彦作が妻のおみき又一人は娘の春汝が確かに下手人の一人たるとは供の者たる之なる男より聞いて確かに知る今こそ廻り合ふたは天の與へ父良人の仇を報ゆるから覺悟をせよ」さてはと初めて悟つた奈良原良將監　將「さては汝等親子の者衆て吾等を敵と覬つて廻るとは聞きつれを此所にて巡り合ふ

からは返り打ちだから覺悟をしろ」云つたが將監無刀だから助からない高が女の母子で何か出來るものか折りあらば一刀を捨ち取つてあべこに辛き目を見せん間を透かして近寄る將監たみきは透かさず一刀をすらりと拔いて切つて掛る初太刀將監体を變したが此方もおみき武術鍛練の腕二の太刀を右つと云つて切り下ろす將監の肩先から胸先までばらりずん深手だからばつたり其所へ倒れた將監今度はお春が透かさず夫へ立ち寄つて　春「父の敵の奈良原將監今天命を思ひ知れと苦しむ奴を助かせずふつ一つ止めを刺して仕舞つた此時一生懸命に見て居た久八星明りに樅子も知れたから　久「御見事でございますと聲を掛けて雀躍りいたし此所へ來つて將監の死骸を谷間へ蹴落し　久「さあお兩人様委しいことは宿へ往つてお話しをいたしますから跡の宿までお戻り下さい　みき「おー久八お前も御苦勞であつたして將監

のこの荷物は　久「さあこれには色々敵を探ぐる手掛りに成るものか這入つて居るたらうと存じます之は私しか持つて行きますから切望一度此所をお立ち戻り下さい」と兩人を勸めて久八が小佛の峠と跡へ戻り其夜の内に與瀬と云ふ所まで來て此所で旅籠を求め遊りを忍ぶ物語り　久「御新造樣私しが申し上る一通り長いことてはございますが切望お嬢樣もお聞き取り下さい先年旦那樣か非業にお果なされた時私しは供をいたしました甲斐もあく面目なさに追腹を掻いて果てやうとは思ひましたかいやく生は難く死は易しとやら況して旦那樣の御無念を思へば中々死ぬどころの詮議でない九牛一毛之までの御恩義にろれと知れた敵崎山父子のものへ一太刀なりとも恨まんと其後お暇を願ひましてからは江戸市中を徘徊いたし只管敵の行方を探ぐりましたが一向手掛りもありません空しく無念に月日送ります内流れ

て甲州路へ來ましたのが恰度二年あと勝沼と云ふ所へ逗留をいたし知己の者に便りまして果敢ない世送りをいたしておりまする去年の暮不圖としたことから彼の奈良原將監に出逢ひ先きの顏をば見知つて居れども此方は下郎の分際ゆへ向ふで知らぬを幸はひに其頭將監は矢張り世を忍ぶ住居でおりました私は折よく此所へ奉公住みになりました樣のお恨みを晴らさうか翌日は切つて掛なうかと存じましたが遺り損なては一大事ろれよりか一人でも敵が知れて居る上は外の崎山親子の行方も知れるであらう之を探し出すの折まで無念を忍んで彼に仕へ首尾能行方を突き止めた上貴方々にお目に掛り力を合せて恨みを晴らさんと將監が始終の擧動を見て居る内此度急に江戸へ立ち越えるとのことゆへにさてはと私しも同道して折から伺ひ貴方樣にこのことお話し申さんと思しみにいた

してまいつたる途すがら蹟なく達ひましたは何よりの仕合せ昔に代る貴方々のお腕前まづ以つて將監に仇を報ひし今日の喜び は重疊でございますして御新造樣斯うしてての甲州路へお道入りなさいましたは敵崎山父子が此方へ來たと知れての上でございますか　みさ「さあ此甲州路へ來るまでには樣々の話しもあるけれど之は追々に話します妾達母子のものが厄介に成つて居りました香取相摸の弟子に平井仙龍と云ふ者があつて此者の話しより正しく崎山父子のものがこの甲州路へ來たと知れましたから長の年月待つた敵のこと取り逃がしては殘念と話しを聞くと直樣に母子支度を調へて此所まで來たる其折柄其方に出合つて手初めに敵將監を打ち止めしは其方の骨折今改めて禮を云ふして久八お前の話しに那の將監が旦那樣に鉛を付けたと云つたがそれを探つたか　久「其ことでございますかられは私が

將監方へ奉公いたしまして實直に勤めまするゆへ氣を免るし或夜將監が酒機嫌の自慢話しにいたしましたが旦那樣が御最期の折は確かに將監の鉛が太股を突いたと申しました　みさ「外には崎山親子の者のみであるか久八聞き込んだものもあらう　久「其等の所は一向話しにもいたしませんが何でも此荷物の裡を調べたら何か手紙のやうら者でもございませう　みさ「宜いとてろへ氣が注いた早速取り調べて見るが宜い」と此所で久八に將監の荷物を取り調べさして見たが別に之と云ふ手掛りの者もない只一つ殘つて居る手荷物の方を明けて見ると山角平角より奈良原將監殿として宛てた親展の手紙がある　久「御新造樣此所にてんな手紙がありますがてりやあ御存知ではございませんか」おみさが受取つて見ると封書の上には右の通り書いてある　みさ「山角平角と云へば崎山の家來さては之も同類であつたるか　久「へえ

「それしや貴女は御存知でみき」顔は一度見たことは無いが兼て良人より聞いたる姓名中に何んな者があるか調べて見やう」と中から書狀を出して調べて見ると其文言の意味では兼て一同にて山崎彦作を殺害いたせし以來は互ひに離散いたしてあぢきなき世を送り彦作が妻子の敵と覘ふのを避けてはおれども江戸においてもはとぼりの覺めたころであらうから幸はひ貴殿が江戸へ出立するなら何所でも江戸へ所を定めて知らせてくれろ左すれば拙者は勿論崎山平内も再度江戸へ立ち戻つて江戸の土に成りたいから何分骨折りを頼むと云ふ將監へ宛てた平内からの手紙の文言おみき一生懸命に讀み終つたが山角平角の住家が當いてないみき「斯くまで確かな證據が手に入りながら敵の行方が知らぬとは殘念である兎にも角にも將監が勝沼と云ふ所に住んで居たならそれより程遠からぬ所に住まつて居るに相違ない

これは一日たりとも捨ておくべき時でないから早く其勝沼とやら云ふ所へ往つて何か手掛りを探さん」と此所で久八は道案内として連れて往くことにいたしお春にも委細の話しをして翌朝與瀬と云ふ所の旅籠を立ち出でそれから二た瀬越を渡り段々道を急いでまいりましたが敵に巡り合ひまするや否や

第八席

話頭轉へ戻りまして此方は崎山兵右衛門同平内の身の上でございます父の兵右衛門は神保家御勤務中納金を使ひ込み其尻が割れたところより偏へに山崎彦作の仕業と恨み終に親子計つて彦作に非業の最後を遂げさせしより屋敷は勿論江戸の市中を憚る身と相成りましたから僅かに麻布芋洗ひ坂なる江上觀柳に便つて一軒の借家をいたし此所に住つて居る折しも彦作の妻子が自

分達を敵と覘ひ劍道の秘古意なく一方には自分達の捜索に力を盡して居ると云ふことを覗柳から聞いて大ひに慌ろき早速其時の下手人川口嘉作岸上主膳と云ふ者を呼びよせて二六時中用心に怠りは無かつたが嘉作は病死いたし主膳は行方不明と相成りましたから大ひに力を落して居る折しも兼て前席申上げました通り京橋の橋上において娘ながら腕の勝れたるお春に出逢つて膳を設し直ぐに吾家へ立ち歸つて父の兵右衛門に此ことを話しをすると兵右衛門も慌ろいたが何しろ其時病氣であつたから急に江戸を立ち退く理由にも往かずうか〳〵として月日を送つて居る内に彼奈良原將監并に山角平角が甲州に落ち付いたから時を見て能り越すが宜いと云ふ報知兵右衛門の病氣は輕快であるし旁々何うしても江戸を立ち退いた方が都合が宜いと弥々江戸を立ち退かうといたしたときに兵右衛門は病身ではあるしも

一取る年であるから心細く思つて周易でも占なつて貰はうと立ち寄つたのが平井仙龍の宅これから早速支度を調へて江戸を出立いたし甲州路へ掛りました時恰度猿橋と云ふ宿の旅籠へ一泊いたしましたが其夜旅をいたしたために病氣の重つた物か兵右衛門は非常の苦しみうーむ……うーひと云つて唸つて居る平「阿父さん何所かお悪うございますかお撫り申しませう」「惡人でも親子の情愛は又格別平内が只管介抱をいたしたが中々治る樣子もない早速宿の亭主に頼んで醫者を迎へて貰ひ種々治療をいたしたが其甲斐なく兵右衛門におきましては三日三晩煩らひつゝけで果敢なくあつて仕舞ひました平内はあまりのことに落膽いたし亭主の取計ひで然るべき寺へ葬り他郷の土へ埋めたが斯う成つて來ては弥々心細くつて相成らん直ぐに勝沼へ往つて將監や平角を尋ねたいとは思つたが何しても急に道中を仕やうなぜと云

ふ勇氣はない少しは持金も有ることゆへ此所に暫時逗留して其内氣分でも快よくなつたら勝沼へ出掛けて往かうと旅宿にあつて毎日ごろ〳〵して居りますすると此所の家に二十四五位いに相成る所の女中一寸小巻波離した姐さんで何時この平内を說き伏せましたか憎くからぬ情交と相成り今じや平内爲ぐ所の恋色じやあ無い或時女に向つて　平「はなや私も江戸を出掛けて來てから餘程經つが何時まで斯うして旅籠屋住居の出來る身体じやあ無い勝沼と云ふ所へ往けば少しの知已もあるから何とか其所へ往つて相談をした上改めてお前を連れに來やう　はな「るれはも一私しも承知いたしておりますする貴方と縁あつて斯う云ふ情交になりました上はこの物入りのする旅籠屋へ長くおきたくはございません貴方にお心替りさへ無いなれば妾は貴方からお便りのありますまで乾度お待申しております　平「うむ然う話しが

譯つて呉れゝば誠に難有いそれじやあ私は翌日にも一旦此所を立ち退いて勝沼まで往つて樣子を見るから切望お前も心の變るやうなことなく私から便りをするまで待つて居ておくれ　はな「宜しうございます就きましては平内樣仇厭らしいことを申すではございますが私しは斯う云ふ理由の勤め奉公貴方は自由の利く男の身体何日何時外に色をお拵らへに成らないとも限りません万一や然う云ふことでもございますと私しは女でございますから未練ぽいのは當り前貴方のお名前を世間へ出してお密事なすつてる身の素性をすつかり申しますからるのお心得でお在で下さい　平「ろりやあもー私に心替りのあつた時は何んなことを云はれても仕方はあいが今まで内密にしたことだけは私が了見違ひさへ仕なかつたら決して人には云ぬ樣にしてくれ　はな「仰しやるまでもございませんそれじやあ必らずお心替りの無い

やうに　平「其方も二言のない樣に」と此所で二人は談し合ひ一先づ別れることに相成つておはなにおきましては素の身分平内は身支度をいたして猿橋を出立いたしうれより道を急ぎまして勝沼へ相着し早速將監を尋ねまして久し振りの對面をいたし初めの内は之と云ふ世渡りもありませんからづう〳〵いたしておりましたがする内に平内におきまして或る手蹟を持つて甲府代官の下手廻りを勤める樣に相成りましたから甲府へ往つて一軒の家を借り江戸から持ち來つれる所の金子を持つて直ぐとおはなの元へ相談をいたし身の代金を旅籠やへ拂つてお花を自分の手許へ引き取り夫婦暮しで送つて居る。

山角平角は此時いまだ無職であるから之を幸ひにして平内方へ同居をいたし食客をして其日を送つて居る内に遠くて近いのは男女の道仇時かお花と末を契つて水も洩さぬ中となつたがさて

斯うなつて見ると平角は平内よりずーつと男振りもよく氣前も何所た面白ろい所があるから水性のお花今は平角の方へずつかり迷ひ込んで仕舞つて良人平内が留守の折なぞは誰憚らぬ振るまい町内で知らぬは亭主ばかりなりと云ふ川柳がある平内は少しも之を知りませんお花平角におきましては兩人で樂しんでおりましたが或時　花「平角さん妾しあお前さんと斯う云ふ情合にあつてからはつく〳〵彼の平内が嫌になつた何うか一日も早く貴方と二人で心置きなく暮らして見たいが貴方は何う云ふ考へで居ります　平内「そりゃあお前に云はれるまでなく何時まで食客をして居るのも氣が利かないから一日も早く宜い月日の下で樂しみたいとは思つて居るけれども何にを云ふにも先年江戸において那の平内と心を併せ山崎達作と云ふ者を殺害してあるから迂濶理江戸へも立ち歸れず何う仕やうかと思案最中何うかな

あ嫌でもあらうがも一少し辛棒をして居てくれ　花「辛棒して居ろと云ふのもも一長いてつちやあございませんが私しは斯んな氣性だから嫌と思つたら平内の顔を見るのも嫌になつてはんとにむしつが走りし相よ　平角「何て旨く云つて居るんだらうそれでも平内様見捨てると利きませんよ妾しやあお前さんの爲めなら手鍋でもつてゐやうあことを云つて此まあお屋敷へ乗り込んで來たんだらう　花「止しておくんなさいよ那んなひよつと野郎のおたんちん野郎に迷つて來るやうな妾しじやあ有りませんよ猿橋で旅籠奉公をした時やあまだ平内に金子はあつたし一寸摘み喰ひも仕て見る丁見に成つて身体を任かしちやあ見たものい何んだか今日とあつちやあ那れでも妾しやあ男だらうかと思ふ位いしみ〳〵厭になつて仕舞つた　平角「然うか金子のある内やあ旦那様で無くなつて來たらひよつとこ野郎ちやあ虫が宜す

ざるてりやあ乃公見たいな一文なしやあ初まりからお斷り申して肱鐵砲の用心に楯板でも削つておく方が宜らうか知ら　花「何くらしい言を仰しやいよ金が無くつても一文なしでもそこを承知で惚れたお前さん是非世話をして見たいと云ふのが妾しの苦勞性さ　平角「何だか厭に撥げるけれども落とすちや利かない子花「落とす位いなら斯んなひよつとこの例へ辛棒して慇懃やをしちやあ居ませんよ世間に男と米の飯やあついて居るつて云ふけれど妾しやあ貴方の外に男と云ふものは無いと覺悟を極めました　平角「然んなにおだてるなつてゐ事だ併しお花考へて見りやあ斯うして居るなあしみ〳〵乃公も嫌になつて仕舞ふひよつとて野郎でもおたんちん野郎でも歸つて來りやあお前の亭主乃公は名に負ふ食客だ他かの間人目を盗んで何樂しみのことがあるものか寧そ江戸へ飛び出して曲つたあ少にも二人の世帶夫婦云

はれて暮らさうかなあ　花「平角さん妾しやあ決して何んな苦勞でもいたしますす貴方が死ぬと仰しやれば妾しが先に死んで見せます此んな所で難命を縮めて少さくなつて居るよりか間違ひがあつたら間違のあつた時ですから何うかお前さんも男らしく度胸を据へて江戸へ妾を連れて此所を立ち退いて下さい　平角「お一如何にもそれじやあ連れて立ち退かう　花「一緒に逃げてくれますか　平角「併し急ぐことを仕損じる那の勝沼に居る將監と云ふ奴が近い内に江戸へ出立をいたすから宜く乃公から頼んでおいて心當りを探して貰ひ其上兩人で往つて暮さう　花「然うでございますか待ち遠うのことぢやあございますかうんな急つかちのことと云つたところで仕方がありませんからそれじやあ一まづ將監とか云ふ人から沙汰のあるまで待ちませう」と密談をいたした二人の不義者平内は斯んなことは知りませんする内に段々

樣子が妙だから氣が注いて見ると怪しい挙動ばかり何うしてくれやうかと考へた平内　平「太い阿魔も阿魔だが平角も乃公に厄介になつて居る身でありながら不義を仕やうと云ふは人面獣心飼犬に手を噛まるゝと云ふのはこのことだ直ねておいて四つに致す所だがまだ〳〵それにやあ早や過ぎる辛棒の出來るだけは仕ておかう」とじつと虫を押へた崎山平内素知らぬ顔で兩人の樣子を内々見て居たがさて斯う氣が注いて見ると妻ながらお花と云ふ婦人は愛想の盡きる程の淫戯なもの　平「世の中に忌々しいこともあるものだ那の女に限ちやあ然んな了見はあるまいと無し〳〵の金子で身の代金を拂ひ大事を明かした女だからやれ安神と思つたが早いか此頃の不義不貞又平角の犬侍男と云ひ女と云ひ迚も斯うなつた暁には生かしておくべき奴ちやあない此所で成敗をして仕舞ふのも宜いがそれじやあ仕事が拙づすぎる乃

公も近い内に一度江戸へ往つて様子を見やうと思つた矢先だから何とか旨く連れ出して所を選び跡の障りの無いやうに今日までの腹癒をしてやろう思圖々々して居て先きを越され逃げ出されでも仕ちや気が利かない然うだ〳〵」と平内深く心に巧んで或夜お花との寐物語りに　平「お花や乃公も今しやあ斯うして両人暮らしで別に不自由と云ふことなく暮らせる様に相成つたが何うも幾年立つても故郷忘し難しで江戸のことが忘れられない依て一まつ近い内に此所を畳み江戸へお前を連れて往きたいと思ふがお前は江戸へ往く氣は無いか何にも知らない女房の花　花「はあ然うでございますか妾も江戸は貴方の故郷でございますから是非共一緒にまいりたうございます　平「お前か然う云ふ必なら乃公は今日でも出掛ける必得それじや二三日の内に支度をして此所を立ち退くことにしやうと相談をいたしたが豎日平内

は役目を以つて出仕をする跡はお花と平角の二人か花が　花「平角さん　平「何だい　花「何だいじやあ有りませんよ何う云ふ風の吹き廻しか那のひよつとこ野郎の平内が二三日の内に此所を畳んで江戸へ立ち戻らうと云ふことです　平「うむなゝ成程然うか　花「貴方は之に就て何とか考へることは有りませんか　平「然うさ大將が江戸へ出掛けて行くと云ふなら此方の爲めにやあ宜の幸ひけれども お花ひよつとすると野郎何とか此方の中を成付いたかも知れない　花「さあ私もそれが心配でなりません人殺しをする位いの奴だから二人の中が斯うだと知れては何んなことをするかも知れません　平「厭に怖けるじやあないか人殺しをした人間が何んで恐ろしいのだ平内が人殺しをして居りやあ乃公も人殺しをして居る身体両人の中を知つて居て連れて往つてくれりやあ仕合せだ乃公も江戸へは出たい出たいと思つて居

た矢先將監からあ便りもなし路銀要らずで江戸まで往けりやあ
こんな結構なことは無い　花「貴方はそんな呑氣なことを云つて
在つしやるが油斷をして居ると飛んだ目に遇ひますよ　平「何も
彼も承知して居るからお前が案じることはない　花「ろれじやあ
貴方にも覺悟がおあんなさいますか　平「うーむ一足此所を踏み
出しやあ相手は選まぬ乃公の身体坊所柄を見て平内を唯一打に
して仕舞やあ兩人は世間晴れての夫婦萬事は方寸にあるから必
配するな　花「けれども間違と云ふものは何所にあるかも知れぬ
もの万一誤まつて貴方にお怪我でもあつたときは……　平「其所
が乃公だから大丈夫兎に角出立と成つたら氣を注けてお前が道
中をするが宜い　花「貴方も切望御油斷なく」と二人は内々示し合
せて云はず語りに平内を殺して仕舞はんと云ふ了見。
頃て日も定まりまして平内は支度を調へ之から江戸へ向けて立

ち戻ると云ふてとの委細を山角平角に話してあるから内心は兎
も角表向きは柔ぎて甲府を出立いたしましたのが恰度正午過ぎ
三人は各自腹に一物あるから互に油斷はありません勝沼から駒
飼頃て笹子の峠へかゝりましたが何の異常もあい此笹子峠と申
するは之も登り下りで三里の峠恰度甲府の方からまいりまして
向うへ越へ下り坂にありまして頃て半道計りも下つて來ると此
所に有名なる矢立の杉と云ふ年古る大木がある平内平角お花の
三人は道を急いで此矢立の坂まで來ました頃はもー日もとつよ
りと暮れまして人の影もなく四方寂として物淋しき有樣此時平
内心中に　平内「さあ不義者を成敗して仕舞のは此所だ油斷がな
つたら一と打ちにして呉れやうと斯う考へて油斷がないすると
此方も山角平角　平「さあ此所だ此ひよつとこ野郎を殺して仕舞
へばお花とも緩くり添はれる理由と思案をしながらお花は何う

しておるかとひよつと振り返つたのは平角の油断此方は眼さず平内が一刀ぎらーり抜き打ちに平角の肩先へ切り付けた無念と云ひ様たちまち後へ下る所を腕利の平内二太刀目を平角の眉向額からあびせかけ倒れたところを乗りかゝつて止めを刺すお花は此有様に驚ろいて逃げ出し聲を限りに　花「あれ！……人殺し……」と一生懸命平内は其跡を追つかけて往つたが男の足に女の足漸く追ひ付いたらしろから物をも云はず切り下ろし倒れた所を之も全しく止めを刺さうといたしまする時今までは氣が注かなかつたが直ぐ眼前近く來た所の二三人の人影があるはつと驚ろいて向ふを見遣かした崎山平内心に悟つた事があるか突然傍らの籔を潜つて何所其なく逃げ去つて仕舞つた。

今平内がお花の身体へ止めを刺さうといたしました時來かゝつた三人の人影と云ふは之何者であると云ふに之は山崎治作が後

家のおみさと娘のお春幷に久八」との三人でございます人殺しと云ふ女の叫び聲が聞えましたから怪しんで此所へまいりまする　と今其所に居た曲者は何所ともなく逃げて仕舞つて女が一人其所に倒れて居るお春は閉なながら之を見附けまして　春「あれ阿母さん此所に人が倒れておりまする」云ふからおみさが其所へ立ちよつて見ると虫の息ながらまだ生ある所の女の身体　みさ「何う云ふ方か知らないが何者の爲めにか切られたと相見える」云ひながら抱き起して懐ろへ手を差し入れて見るとまだ温いから　みさ「もし……確乎なさいまし久八や……お前大きな聲を出して呼んで御覽　久「宜しうございます……もし確乎なさらあきやあ不可ません」疵口と思ふ所へ手を宛てゝ大きな聲で呼んだからお花は苦しき息を吹き返して　花「はゝゝい離有う……あ痛た……」苦しむ聲のみで委細が知れないから兎にも角にも人家のある所ま

で連れて行かうとおみきが心切にも苦しむお花を久八に背負せ笹子峠を登り切つて今度は甲府の方へ下り坂一丁計り下りた所に甘酒茶屋と云つて二軒の茶屋が左右にある此所へ一同は這入り込んで委細を話し色々手負の手當をして見ると左のみの深手でも無かつたものか漸く心も吾れに返つた樣子　花「何うも皆さん飛んだ御厄介に成りまして私しは花と申しまするが今宵は圖らぬ災難で已に一度は命も果てましたとのこと貴方々樣のお蔭で助かりましたは私しの仕合せ何とお禮の申しやうもございません　みき「お花さまと仰しやいますか何よりお氣が注きましてまあ〳〵結構なことでございますまだお年もお若い御樣子だが何うした理由で今宵の災難お差支へがおくばお話し下さい　花はい之には深い理由のありまして申し上げ憎くうはございますが云はゝ貴方々樣は私しが一命の大恩人實は斯々云々の次第

と一伍一什を語り明かしましたのを聞いて猛るあいた主從三人中にもおみきは心も心ならず　みき「してその平内と申す貴女の良人は　花「何ういたしましたことやら私しは一太刀脊中へ受けまして其跡は何にも知りません　みき「それでは矢つ張り那の山者と思ひしはさては平内であつたるかられとは知らず逃げ行くまに〻見逃せしは此方の誤り知らぬことゝは云ひながら殘念のことをいたしたと口へは出さぬがおみきにおいては歯噛をなして口惜がるお春も久八も共に殘念に思ひまして　久「此上は御新造樣一刻も早く此所を出立して彼の跡を尾けるより外にいたし方はありません　みき「如何にも其方の云ふ通り江戸へ立ち戻ると云ふ那の平内今此花と云ふ女の話しを聞くと兵右衛門は旅で死し平角も又平内の手に掛つて死んだとのこと敵と殘るは平内一人であるが程も往くまいから跡追つかけて取り拉へ多年の恨み

を晴さん」と主從三人は其夜の内に身支度をいたし峠の甘酒茶屋を出立いたして來た道へ立ち戻り兎に角江戸へ立ち戻つたものに相違なからんと道中必當りの者へ尋ねながら再度江戸へ一同は立ち歸ることゝ相成りました。

第九席

此方は崎山平内遺恨重なる平角を一刀に切り捨て次いで不貞の妻お花に一刀を浴びせ倒るゝ所を乘り掛つて止めを刺すうといたしひよつと氣が注いて向ふを見ると直ぐ程近く人が來て居たから驚ろいて止めもいたさずに此所を逃げ歟傳ひに笹子の山中を何う脫け出して來たものか漸う此方の駒飼まで來て息を吐き平「之で恨みは晴らしたが究然人の居たには驚ろいた今から江戸へは何うしても立ち戻る心得りだがこりやあ迚も此方を往く理

由にやあ不可ない一とまづ甲府へ立ち戻つて宿を取り歟澤から富士川を下つて東海道を氣永に上つて歸つた方が知れなからうと思案を定めた崎山平内ろれから其夜も更けて甲府に着し或る宿を求めて翌日早朝に此所を出立いたし歟澤と云ふ所から富士川の急流を船にて下り駿州岩淵へ上つて此所から東海道を一人旅ぱつり〳〵と歩行いて往く途中途連れになりましたる所の一人の侍は當時江戸表にて七百石のお旗本藤井家の家臣歌澤求女と云ふ方であります段々話しをして道中をして來る内平内素より喰へない人間であるから心中考へまする樣を見ると何うも人柄と云ひ何所となく心切深さうな人物だ乃公は今から江戸へ往つたところで何所へ落付こうと云ふ身体では無いこりやあ何んでも此所で斯う云う人物に往き合つたのは乃公の仕合せ何でも宜いから慣れつぱく持ち込んで此人の袖に縋

がり江戸へ往つても食ふ所だけはあるやうに拵へやう」と斯う考へました平内已に名乗り合ひました時に自分は三宅文術と云ふ偽名を使つて居る　文「歌澤殿斯る道中で初めて逢つた貴殿に無理のお願みながら拙者も一度は江戸へ出でゝ江戸の繁華を見たいと存じ遙々故郷を振り捨てゝ之まで參りはいたせしものゝさて江戸へ罷り越したとてろで何所とて身体のあるではなしまゝとに心元ない拙者の一身失禮なる申し條ながら切望貴殿のお取計らひにて如何なる所の奉公たりとも厭はぬ故御盡力の程願ひたう存ずる歌澤求女は之を聞いて　求一樹の陰一河の流袖擦り合ふも他生の縁とか申すなるに況して武士は相身互身斯く一緒に道中をいたすも何にかの御縁でござらうから江戸へ立ち戻りの折は拙者及ばずながら盡力いたすでござらう　文「何分お取り成し願ひまする」と平内は偽へに此人を偽らうとするから何から

何まで心を置いて今はすつかり猫を冠つて居る頓て急がぬ道中あがらも程經て江戸へ相着しまするとと歌澤求女　求「三宅殿とやら彌々江戸へ着したが定めて貴殿も土地不案内とあつてはお困りでござらう追て然るべき所へ御世話をいたす心得ではあるがまづ當分のとてろは拙者宅へ御逗留をしてお出でなさい　文「難有う存じまする然らばお言葉にあまへて御厄介に相成ります」圖迂々しのは崎山平内見ず知らずの歌澤求女を誤魔化して到當求女の宅へ厄介に相成つたする内に平内も萬事に氣を注けて立ち働くから求女も眼を注けて殿へ申し上げ侍分にして召し使はるゝ様に相成りました。

話し後へ戻りましておみき主従の一行は彼笹子峠から夜道を急ぎ甲州街道を逆戻りに段々元來た道を歸つて到當江戸へ着しましたが敵平内の行方は知れません殘念ながら南傳馬町の相撲の

宅當時平井仙龍が跡嗣でやつて居りまする所へ立ち歸ると仙龍も此日頃待ち兼ねておつたるとゆへ大ひに喜び早速ながら仙「よくまあお歸り下すつたして敵打は如何御本懷を遂げ遊ばしましたみき「されば仙龍殿お聞き下さい貴方からのお話で直ぐは甲州街道へまいりまするとあの度二た瀬越とか申しまする所で往き合ひましたのは之なる久八之は良人彦作在世の砌り召し使つたものでございまするが此者の助けで敵の〻人奈良原將監と云ふものを打ち尚も樣子を探つて見ると敵は崎山父子の外山角平角に岸上主膳と此兩名主膳とやらは病死いたし崎山父子に山角平角は甲州に住居をなすと樣子が知れましたから路を急いで往く途中笹子峠にて斯々云々」と之までの一伍一什を話しまする

と仙龍においても嘆息いたし　仙「段々お話しを承はるに如何にも氣の毒なるはうのお花とか云ふ婦人であるが彼等の所行と云

ひ平内の行方はその女の云ふところに相違でざるまい嘸く平内江戸へ立ち戻りしと聞く上からは追つ付け其姿も現はすでございらうからお心忙くは道理なれど此上は委細のことを石田殿にも相話し共にお力添へを願むが宜からう」と無念ながら仙龍も兩人の者を宥どなしたおみきお春におきましては其翌日早速南新堀なる石田五郎助方へ尋ねまして委しい話しの物語りをいたし此上共何分頼む由申しまするとあれば此上もないことと拙者市中見廻りの役目を以つて之から後は心を注ぎ明日にも彼を見出しなば御報知申すから決して御落膽なさらぬやうと何時も變らぬ懇切の言葉おみきお春の兩人も難有涙にくれながら南傳馬町へ立ち戻りさて之から後と云ふものは毎夜の樣に母子兩人で市中を何所とはなく徘徊いたして居る此時久八は仙龍方にあつて厄介の身と成つて居りまし

たがつら〳〵自分で考へる樣　久「何うも今御新造樣やお嬢樣が亡あつた旦那樣の敵を打たうと云つて那れ程御苦勞をなすつて居るに役にも立たないとは云ひながら仙龍樣の厄介に成つてふら〳〵して居るのが乃公の能でもない一番何とか工夫をして此市中を廻つて歩行きせめて敵の在所だけでも突き止めてお兩人樣に首尾能く敵きをお打せ申したいが差し當り商賣と云つたところで資手はなし何と初めたら宜いだらうと考へた久八色々と工夫もしたが旨い手段もないする内に或時おみきに向ひまして久「御新造樣貴方々樣は御大望のために今日此頃の御難儀に立たないとは申しながら私しも何か亡なつた旦那樣への御回向代りに一とつお役に立ちたいと思ひます就きましてまつと恐れ入りますが私しに少し引り商賣の元手を貸して下さい　みき「いゑ久八お前は役に立たないどころではない那の甲州で打ちまし

た將監は皆お前のためめろれから斯れ程に手掛りを得たも云はゞまあお前の陰してお前が商賣の資本をくれろと云ふはそりやあお前の考へでやることだから私が聞く程のことはないがお前何を初める心得えだ　久「然う改まつて聞かれますと何うやら可笑しうございますが御新造樣私しはこから蕎麥賣をいたす心得でへい夜鷹そばやを　みき「然うかいろは賣を初めるとは面白いね　久「へい何うか私しも之まで受けました旦那樣や貴方樣への御恩報じに一時も早く敵平内を探し出したいと思いますが毎日厄介に成つて居てぶら〳〵市中も歩行けませんから夜分だけもせめてはまあ蕎麥賣なりといたしまして此江戸市を隈なく探り方一平内に出逢ひました其折は私しの腕で打つ理由にはまいりませんから其在所を突き止めて貴方々樣にお知らせ申したいと思ひます　みき「何時も感心のお前の丁見ろれしやまあ心任かせ

に仕てやるから思ふやうにして探しておくれ　久「雖有う御座いなすろれとやあ早速私しは蕎麥賣に成りまする」と久八は喜んでおみきから資本を借り夜廻蕎麥を賣るだけの道具を取り揃ろへ信州育ちの腕前で蕎麥は中々奇麗に打ちます　し盛間の内は家で打ちそれから夜になると之を擔ぎ出して市中を賣り歩るき崎山平内の顏を見知つて居るのを幸ひに何時か此市中に居るとあれば巡り合ふこともあらうと雨の夜風の夜の厭いなく骨を惜まず賣つて歩行いておりますが折柄冬にも掛りまして陽氣は段々寒くなる斯うなると夜廻蕎麥や鍋燒うどんやの陽氣でございまして今じやあ久八毎晩の稼ぎで自分一人位いは樂に喰つて往けるけれども元々喰べて往きたいから此商賣を初めたのでは無い何うかして敵平内の住家を探りたいと思ふ一心冬の夜の肌寒きに勇氣を挫かず今宵も今宵とて聲を上げて　久「そー蕎麥う……そばうー……」と賣つて歩行いて居る南條馬町を出て來てから此所が日本橋濱町夜は段々と更けて來るし人通りも至つて少ない此所で一軒彼所で一軒時々御用を仰せ付けられながら今濱町の角まで來て此所を曲ると向ふから來た一人の侍之も同じく此所を曲つて久八の跡からぱつ〳〵來る外に人通りもありません

から久八の聲は寂として夜によく響ける　久「そー蕎麥う……」　そー蕎麥「う……」聲を上げてはきし〳〵荷を擔いで行くと後ろの方からぱた〳〵と人の足音がする一寸久八振り返つて見ると侍姿油斷のない久八之を見逃すまいとわざと足を止めて居ては　久「そー蕎麥う……」件の侍は久八の跡へ尾いてやつて來たが　侍「あー馬鹿に寒い晩だ……」と一人言を云つて歩行いて居る久八は足を止めては　久「そー蕎麥う……」　侍「あー馬鹿に寒い晩だ……」てれしやあ二人で掛合だ寒くはあるし別に憚る人も通らないから

件の侍ぷんと來る蕎麥の香ひに鼻を衝かれて一杯食べたいと思つたものか　侍「これ〳〵蕎麥屋……」久八は待ち兼て居たので

久「へい〳〵〳〵　侍「熱いのを一ばいくれ　久「へい〳〵　畏まりました何うも旦那樣今晩の寒さは又格別でございます私しは何うも此寒さが頭へ響きますのでつひ坊う頭巾をいたしております　侍頭巾を切望御免下さい　侍頭巾を仕て居らうが鉢卷を取つて居やうがそんなことは構はない何でも能いから熱いのを一とつ　久「へい〳〵」久八が蕎麥を盛つて侍に出す侍も寒いから早く熱まらうと思ふのでロの燒ける位いのことは關はない頭りに喰べて居る横顏を久八蕎麥行燈の光りでよく透かして見ると横顏だから能くは知れないが何うも崎山平内にちつくりだ　侍もー一とつ熱い所を　久「へい畏まりました」と又一とつの蕎麥を出す時に侍の面体を正面から見たる久八　久「やあ此奴あ崎山平内だてれで

苦勞の甲斐があつたと思つたばかりで口へは出さない此方は頭巾をして居るから一向何んな顏だか先きへ知れない　久「何うも苦勞して居れば天が助ける今宵此奴に此所で逢つたのは優曇華だな洛野郎奴何んな所へ巣を搆へ込んで居るか尾けておいて御新造樣やお孃樣に知らせ程遠からぬ内に貴樣の命は取るのだがあろれまでは預けておく」と何心なく抑つた代を受け取つて其侍の往くあとを　久「ゑー蕎麥う……と尾いて往く侍は濱町から新大橋へ出て之を渡り八名川町の大河端久八は何喰はぬ顏で久「ゑー蕎麥う……ゑー蕎麥う……侍の足が止まつたから自分は前を往き過ぎて五六間來たところへ荷を下ろしてそれとはあしに見て居ると侍がとん〳〵と門を叩くを相圖に内から潜り門がぎーいと明いて侍は中へ這入つて仕舞つた　久「よし〳〵此所だな洛野郎の巣は此所だな之さへ突き止めておきやあ夫で宜

んだ今に何うするか見て居やあがれ」と久八は雀躍して再度荷を肩に擔ぎ今度はもー呼んで歩く所じやあねい飛ぶやうに家へ歸つて　久「御新造さん喜んで下さい敵平内の住家が知れましたみき「あつ平内の住家を突き止めて來たとか久八して何所の何所に　久「突き止めた先きは深川八名川町で御座います私しが相違らず荷を擔でい日本橋濱町の角へ掛りまするとー後ろから來した一人の侍斯う云ふ折でございますから何者であらうか見たいものだと樵子を伺つておりまするとー人通りはなしての寒さ折よく蕎麥くれろと寄りましたろの侍ひよつと横顔を見ますると何うも平内に似た面体尚能く正面から顔を見ますると彌々敵平内に相違ございません珍らしや已れ平内おめ〳〵として此江戸に居つたるか飛び付いて恨みを晴らさうとは思ひましたが何を云ふにも私しの腕設合敵を見出しても生中の仕損ひを仕ては水の

泡只まあ無念を忍んでは在所を突き止め貴方々樣にお知らせ申すより外は無いと平常から心得て居りましたゆへ到當其場も無念を凝へ段々其跡をついて往くと平内の道入り込みましたは八名川町の大河端黑い板塀のお屋敷で那りやあ確か歌澤求女とか云ふ方の屋敷甲州路から逃げ伸びて彼所へ厄介になつて居るものと見へまする」おみきにおきましては之を聞いて　みき「難有いぞよ久八其方の苦心に由つてろれ程まで在所を突き止めて來た上はもー平内も長からぬ命恨みを晴らすも近い内ではあるが何を云ふにも困ると云ふはろの歌澤樣とやらへ身を寄せて居る平内無暗に他所の屋敷を騷がせる理由にもならないが平内も今となつては身の要心をいたして滅多に外へは出ないであらう　久「其てどでございますが那の平内何うも今夜の樣子じやあ女通ひをして居るに相違でございませんして見ると幾ら用心をして居つ

ても色慾の道には事を忘するゝ世の慣ひ時々出掛るでございませう　みさ「成程然うかそれでは今からお春にも相談をして翌日からでも深川の八名川町其所の邊りに尾けて居て平内が屋敷を放れたが最後永の恨みを晴らしてやらう　久「然うでございますとも屋敷さへ放れて仕舞へば此方の者幾ら平内が次圓太を踏んでもお嬢様と云ひ貴方のお腕前びくともさせるこつちやあありますまいそれしやあ御新造様翌日の晩は私しが兎に角其屋敷の近邊まで御案内をいたしまするから切望私しと一緒にお出掛け下さい　みさ「それも承知しました」と其夜は主從喜びながら各自寢所へ這入りました。

翌日早朝に相成つて母のおみきから娘のお春に委細話して居りますると此時南新堀の石田五郎助方から兩人の者に至急出向いて呉れると云ふ使でございます　みさ「お春石田様から直ぐに來

いと云ふお使ひだが多分は何かお探ぐり下すつてお呼びよせになるのであらう兩人一緒に往きたいが昼間の理に兩人揃つて歩いては人目に掛り万一や敵に悟られては今までの辛苦が水の他妻は追つゝけ跡からまいりますからお前一足先へ出掛けて往つて石田様へ伺ふが宜い　春「御道理でございます阿母さんそれでは一足お先へまいります　みさ「御苦勞だけれども然うしておくれ」兩人揃つて歩行ちやあ目に立つて能くないから一人々々に相成つて南新堀の石田五郎助方へまいり此所で兩人揃ひましたる時石田五郎助が　五「やあ使なぞを遣つて濟まなかつたが私しも少々用事が有つて出向く譯にも往きませんから御出向きを待つて居りました　兩人「色々と御心配を難有うございます　五「時におみきさんお春さん　兩人「はい　五「彌々敵平内の住家が知れた彼は當時深川八名川町の歌澤求女なるものゝ屋敷内に住居

をいたし藤井家に召し抱へられて名を三宅文衛と改名いたして居ります　みさ「石田様宅は其ことに就きまして私しは今朝程にも貴方様のところへ伺ひませうと思つておりました御存知でも御座いませうが彼久八と云ふ召し仕ひ切望敵平内の住家を探りたいと苦心をいたし此頃夜蕎麥賣りを初じめまして夜な〳〵市中を廻るうち昨夜平内に巡り合ひ名乗り合つても及ばぬ腕ゆへ其住居だけ突き止めてまいりましたが之が申すのも歌澤とやらの屋敷でございます　五「左様でございつたかして平内儀此頃濱町の去る所へ一人の女を囲ひ置き一夜おいたり二夜を隔つて其婦人の許へ通ふ様子此上はお兩人共に大儀ながらずつかり御支度をあさいまして二晩三晩乃至は何時までとお厭ひなく八名川町から濱町までの間に身を忍ばせて彼平内を付け狙ひ巡り合つたを幸ひに多年の御本望をお遂げなさい　みさ「難有う存じます之

まで伺ひました上は何條油斷をいたしませう左様なれば石田様何れ本望を遂しましたる其上にお禮は改めて申し上げます」お春もそれへ兩手を突いて　春「何から何まで御心添への程辱じけなう存じます此上は母子一時も早く本望を遂して父上の恨みを晴したう存じます然らばお暇を申し上げて今宵からは御教示しの道筋を守つておるでございませう　五「あーお春さん何時もお勇ましい貴方のお志し必らず御油斷を遊ばすな　春「辱じけなう存じまする」と石田五郎助に暇乞をいたして立ち歸りましたる所の山崎母子密かに仙龍にも此ことを話して其晩から身支度をいたしお春は乘て父彦作が指しておりました近江藤原繼廣の作で目方ばかりでも餘程ある所の三尺一寸の太刀これで敵を一太刀なりとも恨み草葉の陰に在す父彦作の忘執を晴らしてやりたいと思ひましたから女でこそあれ今じやあ此太刀を充分遣ふやうに

成つておりますけれども夜々平内を尾け覗つて居やうと云ふのに此んな大きなものを持つて道を迂路々々して居ては目に付くので困るからこれは久八の蒲麥の荷と一緒にして二六時中久八に放れない樣にして尾いて歩行く主從三人は一心だから實に寒氣凜烈たる冬夜も搆はずおみきにおきましては新大橋を向へ渡つて其所等あたりに身を潜めお春におきましては此方の渡町の邊りに身を潜め久八は新大橋此方の袂へ荷を下ろして往來の人に商賣をして居るが之は商賣があらうとなからうとろんあことは搆はない何でも宜いから敵平内と見たならは向ふ歴の一とつも拂つて兩人の手助けにならうと天秤棒を扣へ込んで居る斯く辛苦をいたして冬空の寒い夜を二た晩三晩夜が深更になつては家へ立ち返り又翌日日がくれますと出て行くと云ふ有樣。

此方はもー天命の近付きましたる所の崎山平内斯ることゝは一

向知りません甲州を立ち退いてから以來歌澤求女方へ面を冠つて遣入りましたが素より惡を働くだけ有つて奸智も利きますから宜い樣に求女の前を作り到當藤井家の侍分に取り立てられ今では何不自由のない身と成つたが獨身者のことであるか今晴時屋敷の内に住まつて居た方が宜からうと云ふ求女の考へに從つて當時尚深川八名川町ある歌澤の屋敷へ住居をいたして居る然る所何時しか平内と三宅文術屋敷の法度を破つて奥女中のお初と云ふものと密通しての者を懐姙したから詮方なく歌澤方を暇を取らせ濱町の或ところへ一軒の家を借り受けさせ此所へ内々住居をいたさせて自分が屋敷の隙を伺ひ密かに通つては樂しみをいたしておりますが今宵も今宵とてお初の許へ來て兩人は充分の呑み食ひをいたし平内の文術は一ばい機嫌でもー歸らうとする文「うれしやお初もー拙者は立ち歸るがお前も只の身体じ

やあ無いから萬事に氣を注けてくれ　初「旦那様今晩はもー斯様に遅くなりまして夜も更けた様子でございますお屋敷の御合もございませうが切望今晩はお泊りなすつて明朝お早くお返り下さいまし　文「乃公も其心得でおつたのだが急に思ひ付いたので夜は更けたらうが立ち歸る　初「然うでございますか强つてお止めはいたしませんが何だかお歸し申すのが厭にあつて堪りません　文「馬鹿おてとを云ふものじやあ無い昨日や今日の中ではあるまいしまだ腹の中には居るけれど男か女か月が來れば產れると云ふ大事の子供を持つて居るゝお前と私だ無闇に歸すが厭だと云はれて乃公が其都度泊つた日には之から行く末のためにもなるまい淋しからうが辛棒してくれまだ翌日の晩でも屋敷の方を差支へのないやうにして綏くり話しをする宜いかお初　初「宜くあいと申しました所でいたし方もありませんそれじやあ切望翌

日の晩は間違なく泊る心得でお出て下さい　文「それも屹度來るとは云へないがまあ翌日の晩に成つて見ての都合だけでもお初乃公の方を確かめておいて内々摘み喰ひでもすると承知しあいそ　初「おほ……御冗戯を仰しやつちやあ困ります平常の身体なら兎も角もお腹がこの有様じやあございませんか　文「それじやあ平常の身体ならやる積りか貴様あ怪しからんことを云ふなあ　初「然んあに言葉尻なんか押へて厭ですよ誰が摘み喰ひがしたいと云ひました然う仰しやる貴方の方が餘つ程賤しいじやあありませんか　文「何を抽者が賤しい眞似をいたしたか　初「法度嚴しひお屋敷に來公して物堅いと云はれた爲を斯んな身体に仕て仕舞つたのは誰方の仕業でございます　文「誰方の仕業もあるものか斯うなつたのは兩人の仕事だは、ゝ　初「併し斯んなことを云つて居たので遲くなつたとそれ歸らうか　初「それじやあ明晩切